
平成VSDCDドッジボール大会！

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成VSDCDドッジボール大会！

【Nコード】

N7011K

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

「それでは、第10回【平成ライダーの頂点は誰だ！ドッジボール大会】を始める」

門矢士の一言で、波乱とカオスが入り混じる大会が始まった…

果たして、最後に勝つのは平成主人公達か、DCDリマジライダー達か！

戦わなければ、勝ち残れない！

そして、龍と蛇の名を冠する男を止めなければ…生き残れない！

1話【権限は人の皮を被ったりリュウガに】

「——それでは、第10回【平成ライダーの頂点は誰だ！ドッジボール大会】を開催する」

相変わらずテンションのおかしい士。

そんな彼を見ながら、無理矢理体操服を着せられた夏海が尋ねる。
ちなみに、はいているのは昔懐かしのブルマ。

2

「士君。いきなり何がどうなってドッジボールなんですか？そして、どうして私はブルマなんですか！」

「作者が息抜きをしたいからだそうだ。そして、そこはノリだ。ナツミカン」

「意味が分かりませんっ！しかも…」

夏海はバツ！と背後を振り返りながら手を広げた。

その先には、歴代平成ライダーの皆さんだけでなく、ディケイドに出たリイマジネーションのライダー達も…

……リイマジの三十路二人を除いて、全員体操服だった。

あのヒビキですら、昔懐かしの体操服で、しかも紅白帽で子供の頃

よくやったであろう…。ウルトラマン被りをしている。

「——なんで皆さん体操服なんですか！？ジャージを着ているのは、ソウジさんとショウイチさんだけじゃないですか！そしてヒビキさんを止めてください！！」

「ナツミカン、普通の服でドッジボールをしたら…。不利なのはワタルとショウイチ（映画仕様）だ」

「どういう理由なんですか！…。っていうか…。ヒビキさん、せめてジャージの下ははいてください！」

「いやー、子供の頃に戻ったみたいで楽しくなってねえ」

理由になっていないヒビキ。

しかし、自重していないのは他にもいる。

天の道を行き総てを司る、天道総司。

…。彼もまた、片手に豆腐の入ったボウルを抱えながら…。天を刺すポーズをしている。

「フツ、俺は高校の時の体操服すら似合う男だ」

「甘いな。俺は世界単位でのコスプレをすべて着こなしていた。…

…俺こそ、なんでも似合いすぎて困る」

「どうでもいいからとっとと始めろ」

メリケンサックを取り出し、装着し始める辰巳シンジに、全員沈黙。
——この瞬間で、全主導権を誰が得たか確定してしまったようなものだ。

士は咳払いしながらも、説明を始める。

「えー、いいか。とりあえずこれは戦争だ。ディケイドチームとオリジナルチームの存亡をかけた、ライダー対戦（平和的解決版）だ！」

「成程！ドッジボールなら、世界も破壊されなくて済むし…ライダーが死ぬこともない！流石士…！」

「それだったら、例えライダー同士の戦いになっても反対しないよ。だって、ドッジボールだもんな！」

小野寺ユウスケと、城戸真司。

この2人が真つ先に、後先考えずに賛成してしまう。

「絶対裏がある」と思って居たのは、ワタルとアスム…

乾巧も、薄々と「嫌な予感がする」と感じていた。

「……本当に、『平和的』なんでしょうか…？」

「…士さんは、たまに世界の破壊者としての本性を前面に出しますからね…」

「しかもドッジボールって、…ああ嫌な予感しかしないぜ本当に」

その後、詳細なルールが語られる。

- チームはそれぞれ、平成主人公チームとリイマジネーションチームに分けられる
- 審判はフィリップなので、検索に熱中してアウトがセーフになったりする事も多々ある
- 平成チームは元々の9人+門矢士
- ただし、リイマジチームは実質8人となってしまうため、代わりとして海東大樹と左翔太郎が参戦
- 外野は最初は二人、但し当てられた人数が四人以上になると、当てられた人間と入れ替わりで入る
- →は“外野をしていた二人”にのみ適応、他は自力で内野に当てて帰るしかない
- リイマジチームは子供が2人いるため、ワタルとアスムのみ横から当ててもOK
- 変身はOK。但し一度きり
- 変身時間は1分、必殺技を使用してボールを投げても蹴ってもいい。但し、この間は顔面ヒットもアウトに入る
- 顔面ヒットは海東以外全員セーフ
- 試合始めのルーレットで、光夏海の【笑いのツボ権】を得られる人物を平成、リイマジの中から一人決定
- 【笑いのツボ権】も、変身同様一回のみ+どのタイミングで使用してもOK
- 笑いのツボを行う相手の指定方法は、ルーレット

「……って、【笑いのツボ権】のために私はいるんですか!？」

「ナツミカン。お前、まさか…この反則者揃いの中で、普通にドッジボールがしたかったのか？」

「…いえ」

確かに、一般人である夏海がこの中でドッジボールなど…

…警察隊の銃弾を受けに行く犯罪者のようなものだ。
それぐらい、危険なのだ。

そうしている間に、審判フィリップが巨大ルーレットを持ってくる。
そこには、クウガやキバと…各ライダーの絵が描かれている。

恐らく、赤い矢印が止まった場所のライダーに【笑いのツボ権】を
与える仕組みなのだろう。

ただしディケイドの絵は土と海東、電王の絵は野上良太郎と左翔太郎の二人に権利が得られる…ということなのだ。

「じゃあ、とりあえずルーレットを開始するよ」

「ナツミカン。回せ」

「私ですか!？」

「——お前が、各世界のライダーの運命を決めるんだ。だが、最低でも龍騎には当てるな。世界の終わりだ。俺が何もなくても世界が破壊される」

「っ、か、さ？」

「……はっ!」

土の背後には、親指を構えるシンジの姿。

そして逃げる土に対し、派手な音を立てながら首筋に親指突きを放つ。

「辰巳流笑いのツボ!」

「げぶっ！」

「『なんか出したよあの人ー!?』」

絶叫するリマジの皆様。

しかし、土は地面に倒れながら…

——笑いのツボと言うより、悲観のツボを食らったが如く泣いていた。

「そうさ…俺が、俺が悪いんだ。俺が『大体分かった』で済ませたがばかりに…そしてついでに、電王映画のこれ以上の暴走を止めなかったばかりに…！」

「『城戸（さん）、おたくの平行どうなってんの!?』」
「俺が知るかーッ!?」

今度はオリジナル勢が、大絶叫。
本当に、最初の内に実権を握ると…結構有利だったりする。

「そんなの興味ないね。じゃあ、ルーレットを開始するよ」

フィリップは淡々と、ルーレットを回す。

勢いよく回されたそれを見て、ライダー達は祈っていた。

……龍騎の世界に当たるな、と。

その結果…

「止まったのは、アギトの絵…津上翔一と芦河シヨウイチの2人が、権利者というわけか」

「あー、俺なんですなー」

「…最悪だ」

天然で軽く流す翔一、背後からの殺気を受けるシヨウイチ。

できることなら、とりあえず（安全に使ってくれそうな）尾上タクミ辺りに譲りたい。

シヨウイチはそう思いながら、平成チームの総司に言っていた。

「——お前だけが頼りだ。うちの悪魔を、破壊神を、…人の皮を被ったりユウガを止めてくれ」

「任せる。俺は天の道を行き、総てを司る男だ」

「……悲観のツボ、いつとく？」

「やめとけ！」

親指を立てるシンジに、それを抑えるカズマはさておき。

——波乱に満ちたドッジボール大会、開幕。

1話【権限は人の皮を被ったりユウガに】（後書き）

えー、【仮面ライダーディケイド〜スマブラの世界〜】を執筆しているハルルです。

こちらは基本的に、シリアスな展開の続く上記小説の息抜き程度に執筆＆更新を予定しています。

キャラ崩壊が半端ないです。

そして、平成ライダーを唯一最後まで見切ったのは、最新の記憶でいえばファイズとディケイドだけです。

笑いと混沌と辰巳の恐怖とツッコミ溢れる小説ですが、最後までお付き合いください！

2 話【剣崎一真の壁】（前書き）

配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介

城戸真司

剣崎一真

ヒビキ

天道総司

野上良太郎

紅渡

門矢士

<外野>

津上翔一

乾巧

D C D チーム

<内野>

小野寺ユウスケ

芦河シヨウイチ

辰巳シンジ

剣立カズマ

尾上タクミ

ソウジ

海東大樹

左翔太郎

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ
鳴海亜樹子

2話【剣崎一真の壁】

遂に始まった、ドッジボール大会。

平成ライダーチームは津上翔一と乾巧が、DCDチームはワタルとアスムが外野に行った。

…DCDチーム、既に横当てを狙う気だ。

「あ、ちなみに…横当てでの外野間パス回しは、往復2回までな」

「…「士今更ああ！！」「」」

本当に今更なルール変更。

こいつ本当に大丈夫か？

左翔太郎がそう思っていると…小野寺ユウスケが、素朴な疑問を出した。

「そつえば、ジャンプボールって誰がするんだ？」

…

…

…

沈黙が流れ、士は頭を捻る。

そのままフィリップの所に行き、コソコソと相談…

そしてフィリップが先程のルーレットに、キバの絵と響鬼の絵、アギトの絵とファイズの絵に赤いテープで【×】マークを貼り、言い放つ。

「——ルーレットで決めよう」

「「「またか！」「」」

「なあ、もうルーレットで勝利を決めたほうが早くないか！？その方が、無駄なく済んだと思う！マジで！！」

叫ぶオリジナル組と、悲痛なツツコミを下す城戸真司。
しかし…

「龍騎に当たる事を祈ってスタート」

もはや多数決総無視で、辰巳シンジがルーレットを勢いよく回転させる。

誰もが叫ぶ前に、剣立カズマがライトニングソニック張りの飛び蹴りを放ちながらツツコミをしていた。

「……自分ルールいい加減にしとけえええ！！」

「はうつ」

「「「破壊の帝王にツツコミ入れたああ！！」「」」

「…剣崎さん、あなたのリイマジ無謀にして勇氣ありますね」

「それが、……仮面ライダー……」

叫ぶリマジチーム、静かに尋ねる紅渡、目を反らす剣崎一真。
どの辺が『それが』だよ、と翔太郎が呟くが……
ルーレットは、非情にもブレイドチームに当たった。

「あ、」

「……かーずーまー？」

「いや、俺のせいじゃないだろ。回したのシンジ！しーんーじー！」
「なんでもいいよ。とりあえず、さっさと始めてくれないかな」

大騒ぎする三番目と、シンジ四番目を放置し……カスマフィリップも自分ルール発
動。

もはや、【俺が法律】状態だ。

~~~~~

ようやく開催された、ドッジボール。  
ボールトスは、鳴海亜樹子が行う……なぜ彼女がいるのかというの  
は、気にしないでおう。

「じゃ、いくよー！」

「よし、…仮面ライダーは絶対に負けない！」  
「何でガンバライドのセリフ!？」

某カードゲームのセリフを言う一真、ツツコミを入れるカズマ。

…同じブレイドでも、どうしてこんなに違うのか。  
巧がそう思っていると、芦河ショウイチが話しかける。

「…お前、『何で同じブレイドなのにボケとツツコミが違うんだ』  
とか思っていたか？」

「あんた何で俺の心が読めるんだよ!？」

「——1話の地点で、シンジに『ツツコミ』という行動を起こした地点で、あいつは既にツツコミが確立されたんだ」

「意見無視かよ!…っていうか、それだったらもう既にボケとツツコミの比率やばいじゃねーか!…特にこっち側!…!」

そうしていると、亜樹子がボールをトスしようとする。

…しかし…

一真とカズマの身長差は、12cm…

明らかに、一真超有利な状況だ。

「いやっ、よく考えたら…反則!反則だろ、おい!!」

「そういえば士さんも180cm台…!」

「せ、せめて一番身長の高い奴同士!身長の高い奴同士!…」

「変身しない限り、ジャンプしても差を埋められないカズマに対し

てどんな仕打ちですか!」

「ワタルは自重してください!」

「お願い剣崎さん、変身して! 剣崎さんがブレイドになれば、身長差は何とか埋められるから!」

「カズマ頑張つて12cm伸びろ」

「…シンジ無茶言うなあああ!」

あまりにも酷い状況に、翔太郎・尾上タクミ・ショウイチ・ワタル・アスム・ユウスケが叫び、シンジが無茶を言いカズマが吼える。しかし、身長の高い者同士と言つても…

ソウジが176cmだが、それでも9cm足りない。最後の手段として、ソウジはショウイチの肩を叩いた。

「——もう一度ギルスになつて、触手でボールを取るんだ」

「無理を言うなあああ!」

『ルールットで決めたんだから勝手に背かないでよ』とフィリップに一蹴され、結局ブレイド対決。

こうなつたらと、シンジとソウジが2人がかりでショウイチを説得（片や脅し）。

「……ギルスになれ」

「そして、触手でボールを取るんだ。それか、アギトの超能力で…」  
「俺に無理を言うな…」

一方の平成チームは、大余裕。

何がどう転んでも、一真が負けるはずはない。

誰もがそう思っていたのだ。——ただ、天道総司を除いて。

「…全員、良太郎の周囲を固める！何があっても、あれの傍を離れるな」

「「「え？」「」」

「それじゃ、スタート！とりゃー！！」

亜樹子がボールを投げる。

ボールは天高く上げられたが、一真にはジャンプをしなくても届く高さ。

よし！と、彼はボールを勢いよく手で叩き落とそうとすると、ジョーカーの力のせいかな（？）勢い余って真司のほうに飛んでいく。  
時速100km/hのスピードで。

「うわ！？」

真司は反射神経がいいのか、頭を下げる。  
だが、その先に居たのは…

「おおよー！？」

——ぶわっちん。

そんな派手な音を立てながら、良太郎の顔面に盛大にヒットした。

ボールはゆつくり弧を描くように飛んで行き…

「あ、あれ？」

それはタクミの手に、すつぱりと収まるように落ちてきた。

その展開に、全員沈黙…

遂には、ボールトスをした亜樹子自身が、フィリップに直談判。

「フィリップ君！あれ、いいの！？ねえ！！」

「…いいんじゃないかな。それよりも、今ムシ。ングについて検索しているんだが…亜樹ちゃん知らない？」

遂に、審判が試合放棄。

…一体どうなる事やら…

誰もがそう思う中、ヒビキは楽しそうにウルトラマン被りをした紅白帽を、アスムに自慢していたが。

「どうだい？結構イカすだろ」

「…今時、その被り方は誰もやってませんよ…」

「少年もやるかい？」

「いえ…遠慮します。誘うなら、ユウスケさんにしてください……」

「…竜君、呼ぶ？」

「やめろ亜樹子、照井を呼んだら更にカオスが増す！」

## 2話【剣崎一真の壁】（後書き）

のっけから良太郎大丈夫かww

剣崎は身長高いですよね…

でも、どうして変身したら身長が低くなるんだろう（笑）  
それでいて体重も軽いんですよ。

いちいち名字書きですが、次回からは普通に名前で行こうかな、  
かと思っています。

良太郎や翔太郎なんかは、錯乱することはないんですけどね…

それではっ。

### 3話【ソウジン乱心】（前書き）

配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介

城戸真司

剣崎一真

ヒビキ

天道総司

野上良太郎

紅渡

門矢士

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

<内野>

小野寺ユウスケ

芦河シヨウイチ

辰巳シンジ

剣立カズマ

尾上タクミ

ソウジ

海東大樹

左翔太郎

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ  
鳴海亜樹子

### 3話【ソウジご乱心】

フィリップが審判放棄をしたため、DCDチームのチャンスボール。タクミは一体誰に当てようかと悩んでいる。

「頼むぞ、タクミ君！」

「パス」

「シンジは自分で取る以外持つな！」

「グッジョブカズマ」

「パスも可能だぞ！」

「「回してください、良太郎さん当てます！」」

「僕的には、——敵味方どっちでもいいからカブト潰してくれないかな」

「おま、カブトに何か恨みでもあるのか！？」

応援するユウスケ、パス希望のシンジ、ツッコミを入れるカズマ、親指を立てるショウイチ、パスを指示するソウジに堂々宣言のショタコンビ、カブトの世界の事を根に持つ海東、叫ぶ翔太郎…

「あの人カブトの世界で何をしたんだろう」

タクミはそう思いながら、相手の陣地を見回した。

「って言っても、当てられそうな人なんて…」

——まず、あの天の道に行く人は駄目だ。  
当てられるはずがない、と言うか、当たってくれる筈がない。  
カブトだけに、カウンター攻撃をかまされるのがオチだ！

——そして、士さん。

あの人も…当てたら駄目だ……！  
後でファイズブラスター宙吊りの系に処される。

——あのヒビキって人と、五代さんはやめておこう。  
なんか、前者は当てたらやばそうなのと…  
後者は…良心が……

——剣崎さん、案外当たりやす……くないね。  
何あの細さ。  
薄い。栄養ちゃんと摂ってください。

——城戸さん…  
でもあの人、あの剛速球レシーブ避けたしなあ……  
っていうか、あの人なんだかんだで後半戦まで生き残って…誰か（  
多分良太郎さんか渡さんの可能性が一番高い）を庇って、「お前は  
生きろ…！」とか言いそうだ。  
……うちのシンジさんは、手頃なカズマさん辺りを盾にして生き残  
りそうですけどね！！

——となると、良太郎さん…

一番当てやすそうだけど、それ故に土さん・天道さん・五代さん・ヒビキさんの狙いにくい人達が囲んでいる……！

駄目だ。

あれ、多分シンジさんじゃないと崩せない。

——渡さん

…駄目だ、草陰から彼の知り合いと思わしき人がナズエミテルンデイス状態だ…

つまり、プレッシャーを遠く離れた場所からかけている。

それは……こっちのワタル君も、そうなんだけどね………うわ、よく見たらビートルファンガイアの亡霊が！って言うか自縛霊だ、あれ！！

「だったら…もう！ここはパスだー！！」

タクミは破れかぶれのパスを放つ。

ワタルとアスムが横当て使用でも倒せるか分からないが、ここで2人の内のどちらかがパスを出してくれれば。

………っていうか、自縛霊ビートルさんのこともあるし…アスム君取って！

そして本物の【鬼】に渡して！！

そんな願いで。

しかし、それも空しく…

「——ヴェー!!?」

ばちこーん。

剣崎の顔面に、派手にヒット。

彼はボールをキャッチしようとしたのだが、顔面に当たってしまったようだ。

…身長が高いがゆえの、軽い悲劇だ。

亜樹子もその様子を見て痛そうな顔をしており、フィリップは淡々と告げる。

「うわー、痛そう」

「変身中ではない上に、当たったのが海東大樹ではない。これはセーフだ」

「——っしゃー！一真、ナイスファインプレー!!」

「……オレヴァ…イダイデイス……」

城戸が喜ぶが、剣崎は…泣いている。

しかも少し、というか大分オンドウル語になっている。

城戸はボールを拾うと、誰に当てようか悩む。

「うーん、子供達が外野なのは大助かりだけど……。俺の平行怖いし…ここで一真の平行当てたら後が……。ここは！ソウジさんかシヨウイチさん狙いだー！」

「俺を狙うなアア！」

「——来い！」

叫び、翔太郎の後ろに隠れるシヨウイチ。堂々と宣言するソウジ。

……城戸は、容赦なく後者の方を狙った。

「っしゃあ！行きますよー！！」

「しかし、

——受けるのは海東だツツツ！！」

ソウジは近くに居た海東の首根っこを掴み、前に出して顔面ガード。ボールは衝撃を緩和し、よりにもよって悪魔を超えた悪魔…たぶん神すら倒せそうな男。

辰巳シンジの近くに転がっていった。

「……フッフッフッフッフ」

「シンジ怖っ！！」

「っていうか、ソウジおまあああ！」

「ししょーツツッ！」

もはや龍騎激情態、という新しいライダーが生まれてもいい程の状態のシンジ。

水を得た魚の如く輝く彼に、即座に叫ぶカズマ（もはや専属ツッコ三人）。

翔太郎を盾にする気満々だったくせに、ソウジの行いは責めるショウイチ。

泣き叫ぶアスム。

——そんな様子を見ながら、ハツと巧はフィリップに訊ねる。

「おい！今、海東の顔面に当たったぞ！！」

「そうだ！」

「審判！！」

しかし、フィリップは…

「——何かな。今僕は、ダイスオーについて検索しているんだ。邪魔しないでくれ」

こんなタイミングで、検索に没頭しているフィリップ。オリジナルメンバーが叫ばない理由は、ない。

「「「おいコラアアアー！！？」「」」

「誰の目にも分かる…盾の仕方だったのに……」

渡も信じられないような顔で、呟く。

しかし…

城戸は何度もカードデッキを出したり戻したり、という奇行を繰り返していた。

気になった五代が、彼に訊ねる。

「どうしたんだ？」

「……いや、変身してガードベント使おうか…迷ってて」

「そんな大げさな。怪人でもあるまいし、そんな危険は全然」

——ギユバアアアン！！！！

ボールがトルネードを描きながら、ファイズアクセル並みのスピードで横切る。

それに即座に反応した天道は、あえて前に出て自分の腕で受け…それを天高く打ち上げる。

そして勢いよく戻ってきたボールを、キャッチしていた。

今度はちゃんとフィリップも見ていたため、アウトにはならない。

「…地面に1バウンドする前にちゃんと取ったし、セーフ」

「…よっしゃー！」「」

「フツ、当然だ（……受けた左腕がまだ痛む…あいつ、人間に擬態したネイティブか……？）」「

そう言う天道だが、それが強がりだというのを分かっているものは

少ない。

ちなみに、……取られた本人は盛大な舌打ちをしていたが。

「——チッ！」

「シンジ、お前黒い。今に始まったことじゃないだろうし、お前の前世も多分そんな感じなんだろうけど、とにかく黒い!!」

「カズマ話長い」

「…お前が長くさせるんだろうがああー!!」

……早くシンジを当ててカズマを楽にさせるか、

……シンジを当てるまでカズマを当てないほうがいいか、

……むしろワタルとアスムを早く戻してツッコミを増やしたほうがいいか、

そんな事を考える、剣崎や城戸。

「…でも、俺の平行当てもすぐ戻ってきそうだな。相手にやるけど」

「だよなあ……」

ちなみに——「カズマを先に当てる」という考えは、ツッコミの損失のためできないでいる。

というか、流石に空気の破壊者・門矢士と空気など知ったこつちやない天道総司も、そう思っていたとかいないとか。

「うーん…50:50か。手強いな」

「お前、……あの泥棒を盾にしたら本当は一人アウトだったんだからな…?」

「そう言っあんたも、大人気なく俺を盾にしようとしただろ…」

### 3話【ソウジご乱心】（後書き）

ソウジは海東に恨みなんか持ってません。多分。

キバコンビの保護者達は、かなり過保護なイメージ。

…キバ見てないけどね。

城戸はタクミの言う通り、後半まで生き残るけど誰かを庇って倒れそうなタイプ。

そして、今度は剣崎が顔面アタック食らいました。

ついでに海東も。

ちなみに、カズマの「前世も」は……ドラゴンブロッサムの世界に行けば嫌でも分かりますww  
怖いぜ辰巳シンジ。

それではっ

#### 4話【発動、DCDドッジ！】（前書き）

配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介

城戸真司

剣崎一真

ヒビキ

天道総司

野上良太郎

紅渡

門矢士

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

<内野>

小野寺ユウスケ

芦河シヨウイチ

辰巳シンジ

剣立カズマ

尾上タクミ

ソウジ

海東大樹

左翔太郎

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ  
鳴海亜樹子

#### 4話【発動、DCDドッジ！】

とにかく現在、天道がボールを取った。

彼はボールを構え、誰を当てるべきか考える。

「——フィリップはまた検索しだして、あれでは海東ガードも判定を取られない…ここは堅実に、パスを回すか」

彼は慎重に、ボールをパスする。

……あの破壊の神を当ててもいいのだが、あれはあれで今一番近いカズマを盾にする。

それだけは、避けたかった。

だって唯一のシンジのストッパーだし。

「渡すぞ、乾！」

「俺かよ！」

「津上じゃ頼りにならん！」

「……くっそ」

巧は舌打ちしながらも、ボールをちゃんと受け取る。

やっと外野パスになり、DCDチームは外野に視点を向ける。

……そんな時だった。

「フツ、こんな時のための特設ルールだ！……五代、変身しろ！」

「え？一体何を」

「いいから！」

「あ、分かった。——変身！」

<Kamen Ride DECADE！>

士と雄介、2人の同時変身。

そして士は、仮にも初代クウガでもあり最初の平成ライダーに……暴拳。

「ちよつとくすぐつたいぞ！」

「え？」

<Final Attack Ride KU-KU-KU-KU  
UGA！>

「『ええええー！？』」

なんと、ディケイドは五代クウガに対しFAR。

しかもそれは、ユウスケとやった「クウガゴウラム」ではない……

ディケイドはクウガの頭に手を置くと、強制的に地面に押し付けるようにしている。

「え？え？」

「いくぞ、これが……俺達の必殺技！」

「え？」

「名付けて、——【ディケイドドッジ】！津上、受け取ったら俺に回せよ！……」

「はい？」

翔一は普通に返すが、

——彼がまともな答えを返す前に、ディケイドはクウガをボールのように投げ始めた。

「どおりやあああ！！」

「うわー！」

「「投げたー！？」「」

「五代さああん！」

「……成程な。よし、行くぜ！」

巧も理解したか、ボールを投げる。

加えてディケイドドッジによって投げられた五代クウガも、津上がしっかりキャッチ。

DCDチームは、合計2つのボールに狙われることになる。

海東は必死で避けながら、フィリップに意見した。

「ちよっ、これはありなのか！？」

「——うーん、一応ボールだし………ありにしよう」

「フィリップでめええええー！」

翔太郎も、ブリッジしながら回避。

——つかディケイドドッジがありなら、……シンジがいつかファイナルベントで直接誰かを狙いかねない。

二つのボールを海東達は避けるが、このままでは被害者が出る。  
そう思った海東は、シヨウイチに言う。

「——アギトに変身してくれ」

「は!？」

「あっちが改定案なら、…こっちは本家だ」

「はあああ!？」

意味の分からない海東の言葉に、シヨウイチは叫ぶ。

しかし…彼が変身する事で打開できるなら、と思ったソウジとタクミが叫ぶ。

「……変身しろおお!」

「お願いします、最悪でもカズマさんが当たったらこっちのチームは終わりです!」

「士は一旦ノリに乗ると、間違えてカズマを当てかねないから…!」  
「シンジを止めるためだ!変身してくれえええ!」

ユウスケと翔太郎にまで言われ、シヨウイチは仕方なく変身する。  
ただし、変身ポーズを律儀にやっていたのでは自分がやられるため…割愛していたが。

「くそっ!変身!」

「変身!」

<Kamen Ride DI-END!>

「そして、痛みは一瞬だ!」

<Final Attack Ride A-A-A-AGITO  
!>

「ふっ!?」

ディエンドに変身した海東は、容赦なくディエンドドライバーでショウイチを撃つ。

こちらは一発当てられて気絶し、その隙に海東は五代クウガ同様に芦河アギトを丸め、ぶん投げた。

「少年君、――投げろー!」

「でええええ!?」

「……僕じゃ確実に無理です、アスム!」

「分かっています! 師匠の思い、確かに受け取りました!」

遂に【ディエンドドッジ】まで発動し、オリジナルチームも避けなくてはいけない事態に……

しかもあちらは横投げもありなので、横からも気をつけなくてはいいけない。

だが……

「……待てよ、さっきワタル『無理』って言ってたよな? 変身は後半まで取っておきたいはずだし……」

「そうか! ディエンドとアギトは対抗策として仕方なくだが、あいつらにとってもこれ以上変身回数は抑えたいところ……」

「だったら、――横はない! あってもパスだけだ!」

城戸と剣崎、渡が叫ぶ。

確かにリマジチームとしても、ここで変身は多用したくない所。ボール一つ分、有利に代わりはない。

「……でも、良太郎当てられないように注意しろよ」

「だな…」

ディケイドに言われ、天道が頷く。

ディエンド アスム、乾 天道、ディケイド 津上間の投げ合いが続く。

しかし、ここで遂にリマジチームに被害者が…しかも二人出た。

「——うわあっ！」  
「うごっ！」

…タクミと、カズマだ。

しかもカズマが当たったのは、ディケイドドッジ…確実に一番痛いほうだ。

フィリップはちゃんとそれを見ており、アウトを宣告。

「尾上タクミ、並びに剣立カズマ…アウト」

「…しまったー！！！！」

「つ、士のバカー！何でカズマ当てたんだよおお！！」

「ゴノヨノオワリダアア！！」

「す、すまん！……つい」

カズマのアウトに、オリジもリマジもほぼ全員絶叫。

しかも城戸と剣崎は、悲観するあまりディケイドを責める。

ディケイドも翔太郎を当てるつもりだったらしいが、もはやそれは言い訳にしかない。

しかし……

「——ボール……もらい」  
「「「はっ！！？」「」」

シンジが、その辺に転がっていた五代クウガを手取る。

——超危険人物が、危険物を持った——  
しかもアスムも芦河アギトをシンジにパスし、通常ボールはソウジの手の内、もはや猛攻が避けられない。

「——つどおおおりやあああああ！！」  
「カズマ、戻れ！」

両手に五代クウガと芦河アギトを持ち、ぶん投げるシンジ……ちなみに一般人。

ソウジは、堅実にカズマを戻すためパスする。  
五代クウガ・芦河アギトを避けたオリジチームだが……次のカズマの攻撃はかわせなかった。

「………<sup>チーズ</sup>士のドアホおおー！！」  
「「「ぶっ！！？」」」  
「——紅渡、アウト。剣立カズマ、内野に戻ってくれ」  
「「………やったあああ！！！！」」

渡のアウトに、というかカズマの復帰に……剣崎と城戸は両手を挙げて万歳。

悪気はないのだろうが、だが、……天道はその気持ちが分かってい

た。

ここでデイケイド・五代クウガ両名の変身タイム終了。

この後もリマジチームのボール＆芦河アギト攻撃が続くが……デイ  
エンドと芦河アギトの変身タイムも終わってしまう。

この地点で、ボールを持っているのは翔太郎だ。

「よし、ハードボイルドに決めるぜ！」

（（ドッジボールに“ハードボイルド”なんてないだろ……）（）

「……せ、背中が……」

「あいたたた……」

誰もが翔太郎にツツコミを入れる中、——ショウイチと雄介は…  
ボールにされたせいで体が悲鳴を上げていたとか。

「うーん、集中できなくて困る。……亜樹ちゃん、携帯貸してくれ  
ないかな？」

「ん？ いいよー」

（い、嫌な予感がします）

#### 4話【発動、DCDドッジ！】（後書き）

遂に各チーム、渡とタクミが被害者に。

いや、しかし、……良太郎…まだ生き残ってる↑

ちなみに、ディケイドドッジとはガンバライドの技。

投稿作品みたいで、どうやら最初は敵サイド（「アギト」）が投げられる技だったとか…

でも、あのディケイドスタッフですからねえww

ちなみに、亜樹子のスリッパを装備したダブルが…っていうのもあるらしいですよ。

本当になるかどうかは分かりませんが。

……ディケブラ本編の翔太郎、スリッパ持ってるし…土もいるし…  
FAR扱いでできるか……（オイ

ちなみに、DCDドッジのカードを持っていないのでFFRかFAR  
Rか分かりません。

それではっ↑

## 5 話【2人の『しんじ』は異常レベル】（前書き）

### 配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司

剣崎一真

ヒビキ

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

<内野>

小野寺ユウスケ

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓復帰

尾上タクミ ×

ソウジ

海東大樹 変身不可

左翔太郎

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ  
鳴海亜樹子

## 5話【2人の『しんじ』は異常レベル】

現在、オリジチーム・リマジチーム共にアウト1人。  
ボールは翔太郎が持っている。

「さーてと、誰に当てるか…それが問題だ」

今ならボールにされた影響で五代が狙えるが、動けない相手に当てるなど……彼の愛する【ハードボイルド】に反する。

狙うなら、多少無理でもいけそうな相手。

しかし流石に天道・士の2人とは勝負したくない。

そうなると…

翔太郎の狙いは、決まっていた。

「よしつ、——城戸真司！覚悟しろ！！」

「俺—ツ！？」

翔太郎は城戸狙いで行くが、見事に避けられてしまう。

ボールはタクミが取り、タクミも城戸狙いで行く。

……しかし、流石に【戦わなければ生き残れない】世界で49話まで生き延びた彼……

回避、回避、回避の連続だった。

「当たってくださいっ！」

「うわわ！？」

タクミの攻撃！

城戸は身軽にかわした！！▼

「当たれー！」

「どわー！？」

翔太郎の攻撃！

城戸はブリッジでかわした！！▼

「……当たってえええ！！！」

「ぎゃー！」

タクミの攻撃！

城戸はブリッジしたままジャンプで避けた！！▼

「あーたーれー！！！」

「うわあああ！？」

翔太郎の攻撃！

城戸は地面に這ってかわした！！▼



しかし。

最低でも49話まで生き残った城戸真司が……四方向攻撃で屈する筈がなかった。

「——どらあああああ！」  
「だー！」

翔太郎の攻撃！  
城戸はジャンプでかわした！！▼  
しかし  
ボールはアスムに渡った！▼

「——たあああー！」  
「うひゃー！」

アスムの攻撃！  
城戸は左方向側転で回避した！！▼  
しかし  
ボールはワタルに渡った！▼

「——てやあああああ！」  
「うわー！？」

ワタルの攻撃！

城戸はバク転でかわした！！  
しかし

ボールは翔太郎に渡った！▼

「——覚悟しろおお！」  
「うぎゃー！」

翔太郎の攻撃！

城戸は左足を180度上げてかわした！！  
しかし

ボールはタクミに渡った！

「——うらあああああ！」  
「どわー！？」

タクミの攻撃！

城戸は跳び箱の要領でジャンプしてかわした！！  
しかし

ボールは収拾がつかなくなったからと

ソウジが相手外野に蹴って渡してしまった！！▼

「……収拾つかん」  
「「ソウジさああああーん！？」「」」  
「当然だろ……」

巧はそう思いながら、ボールを構える。

恐らく、リマジチームの攻撃の要はシンジと翔太郎…

……防御ならむしろ、ボールをこちらに渡したソウジが優れる。つか、いつでも海東・ショウイチを犠牲にできるポジションだ。しかし巧にはシンジを潰せる勇気がない、と言つかオルフェノクの本能からシンジは避けたかった。

そこで狙ったのは…

「——翔太郎！」

「くそつ、俺か！」

翔太郎狙いで投げる巧。

ここは一旦避けて相手の出方を窺うべき…そう思い、翔太郎は避けた。

だが…

ボールの先に居たのは、天道。

そう、元々天道へのパス狙いで巧は投げたのだ。そして翔太郎の背後は、がら空き…

「フツ、掛かったな！」

「げっ！しまった…」

「遅い！」

天道が、容赦なくボールを当てる。

翔太郎は抵抗できないまま、外野行きが決定した。

「翔太郎、アウト」

「あーあ」

「くっそ…！」

「よし！これで相手の攻撃力は激減だ！！」

「っしや！」

剣崎と城戸は、リマジチームの攻撃力の低下に喜ぶ。  
しかし…

後に後悔する。

相手戦力は、翔太郎とシンジだけではなかった事を。

ボールを持ったのは、ショウイチ。

相手は翔太郎にパスを狙ってくるかもしれない。

それを警戒し、天道と土は翔太郎の場所を固めた。

だが…

「よし、行くか」

「来るぞ！」

「皆、警戒しろー！！」

「だが

——狙うのは貴様だ、野上ッッッ！！」

剛速球に近いボールが、良太郎に襲い掛かる。

良太郎は石に躓いて避けるが、その剛速球の先に居たのは……  
ファイズに変身し、ファイズショットを装着したタクミだ。

「……はあああああ！」

「げっ、変身してやがった！」

「いつの間に……」

ボールにグランインパクトが発動。

流石に必殺技を上乗せしたボールは止めきれないと判断したが、全員かわす。

しかし、その直後に再びショウイチがキャッチし、グランインパクトの威力を利用する形で投げた。

「……そらっ！」

「……どわー！？」「」

「あっ、……うおっ！？」

バガン、

そんな重い音を立て、その直後にヒビキが倒れた。

まさかグランインパクト上乗せのボールを投げ返すとは思わず、その威力で屈強な彼も倒れてしまったのだ。

ボールはすかさず城戸がキャッチして相手に渡ることを避けたが、ヒビキがアウトになってしまう。

「ヒビキさんアウト」

「くそっ、おいショウイチ！お前ドッジボールが強いなんて聞いてないぞ……！」

「…警察署でたまに、球技大会があつてな…いや、ウチの世界の球技大会…野球にしろサッカーにしろ、実戦レベルだぞ」  
「…知るかあああ!?!」

むしろ、翔太郎を残していたほうが……シヨウイチの抑えになっていたかもしれない。  
そんな後悔を抱きつつも、この数分間でヒビキと翔太郎…アウト。

「つか、タクミって後何秒変身タイムあるんだ?」  
「30秒です」

「ああー、じゃああいつら…ラスト30秒シヨウイチ ファイズ間の投げ合いを耐えなきゃいけないのか。不憫だな……」

## 5話【2人の『しんじ』は異常レベル】（後書き）

城戸、流石に49話まで生き残っただけあります。  
妙に遅しい…

翔太郎もヒビキも変身ルールがまだ残っているため、帰ってくる可能性は高そうです。

つか、良太郎ことごとく当たってないな…  
最初が不幸だっただけ？（笑）

今回は、尾上ファイズ ショウイチの攻撃に耐え切れるかオリジンーム！

そしてフィリップの呼んだゲストとは？

更にまさかの展開に、カズマが叫び、ショウイチが吼え、剣崎がコートの中で「ウソダンドコドーン！」と叫ぶ！！

……かも？（Σ噓予告！？）

それではっ

## 6話【赤い悪魔】（前書き）

配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

<内野>

小野寺ユウスケ

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓復帰

尾上タクミ × 変身中

ソウジ

海東大樹 変身不可

左翔太郎 ×

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ  
鳴海亜樹子

## 6 話【赤い悪魔】

尾上ファイズとショウウィチの連係プレーにより、ヒビキがアウトになった。

ボールを持った城戸は、パスを回そうとヒビキに投げようとする。

「くっそ！ヒビキさん！！」

「——させるか！」

ヒビキへのパスを、カズマが阻止する。

彼はすかさずボールを、尾上ファイズに渡す…

変身タイムは後20秒。

その間に何処まで相手を倒せるか、また、疲弊できるか…それが尾上ファイズの課題だった。

「タクミー！」

「はい！……遠慮なく、行きます！！」

<Exceed Charge>

右足にファイズポインターを装着する、尾上ファイズ。

——もしかして。

そう思った士は、「逃げろ」と指示する。

「クリスマスだ！クリスマスが来るぞ！！」

「マジかあああ！？」

「ヴェエエエエエエエ！」

「くっ、流石にあれは避けるしかないか」

「必殺技ってあり！？」

士・城戸・剣崎・天道・五代が叫ぶ。

そしてカズマが天高くボールをパスしたと同時に、尾上ファイズもファイズポインターでボールに照準を定め、跳躍する。

——そしてそのまま、クリムゾンスマッシュの体制に入った。

「はああああ！」

「「「ぎゃーっ！」「」」

「…およろし！？」

ばっかーん…

クリムゾンスマッシュは良太郎の顔面で弾かれ、ボールは勢いよくリマジ陣地に。

幸いな事に、良太郎が当たったのは頭の部分。

…アウトは免れた。だが、ショウイチがボールを握り再び窮地に。

「城戸は狙わん。『しんじ』対決をさせたほうが早い…それよりも！」

「どえー！？」

「……無駄にでかい“奴”を叩き伏せるツツツ！」

「ヴェー!？」

シヨウイチの狙いは剣崎。

剣崎は彼のボールを避けるが、今度は尾上ファイズに回ってしまう。尾上ファイズは連続でクリームゾンスマッシュを放ち、剣崎を狙った。

「——せやああああ!」

「ヴェー!ヴェー!!」

「くっそお!俺のせいで一真が当たるなんてごめんだ!」

ここで、城戸がカードデッキを取り出し…龍騎に変身する。

そして彼はすかさずガードベントで、ドラグシールドを発生…  
クリスマシユートボールを、弾き返したのだ。

「どりゃあああ!」

「う、うわっ…!？」

弾き返されたボール。

それは尾上ファイズの顔面に直撃していた。

必殺シユートを返された拳句顔面に当たり、タクミは変身解除…  
というより気絶していた。

「う、うーん……」

「わああああ!タクミさん!」

「しっかりしてください!」

「くっそ、よくも!」

ボールを取った翔太郎が、城戸龍騎を狙う。  
しかし…

ガードベントで防げばいいものを、城戸龍騎はジャンプして空中4回転半をしながらかわしていた。

「うおつとー!?!」

「避けるなああー!!」

「……あれ、取ればよかったんじゃないのか?」

「龍騎のスペックの無駄遣いだな…」

シヨウイチとソウジが、コート隅で話している。

ちなみに、この後この2人は「何処の龍騎も一緒か」だの「何気にファイナルベントのAP高いのにな」だの話していたとか。

しかし…

ボールはなんと、翔太郎の行動を読んでいた士がキャッチしてしまう。

翔太郎は、先程から避けられている恨みが相まって高確率で城戸狙いをする…

それが見事に当たり、彼は今、のんびり構えていたユウスケに一発与えていたのだ。

「悪く思っなよ、ユウスケっ!カズマが狙えないんだ!!」

「えええー!?!」

ユウスケは事もあるうに背中を向けてしまい、背中にヒット。

——何気に、一番恥ずかしいアウトだ。

だが…

フィリップからの反応は、返ってこない。

城戸龍騎と五代、翔太郎が色々言っていたが……

「あれ、審判？しんぱーん」

「アウトのコールは？」

「また検索してんのかよ……まあいい、審判が見ていないならアウトじゃ」

「——俺に質問をするな……」

静かに放たれた、一言。

その言葉で、全員一気に声のする場所を見た……

そこに居たのは、照井竜……またの名を、仮面ライダーアクセル。

ちなみに彼も、この場の空気を読んで……

体操服に、赤い短パン。そして紅白帽（赤側）。

——赤いジャージ、という発想はなかったようだ。

「……なんでお前があああ！？」

「俺に質問をするなど言っているだろう……！」

「おい、ナツミカン！どうしてアクセルがここにいるんだ！？」

代わりに、夏海に質問をする士。

夏海も、照井の登場には頭を悩ませていたそうだ…

「じ、実はフィリップ君が…『検索に集中できないから』と、あの人を呼んで来て……」

「……だからってなんで、照井<sup>あいつ</sup>!?」「」

「フィリップ君が呼べる人間で、仮面ライダーに関係する人っていないば、竜君しかないじゃん」

亜樹子にも言われ、土達はがっくりと膝をつく。

あまりの事態に、剣崎は泣くことしかできなかった。

「嘘だ…ウソダンドコードン!!」

とにかく、照井はフィリップよりしつかり取り締まるせいかユウスケは即座にアウト。

ついでに照井の存在発覚から今に至るまでの、城戸龍騎変身タイムはカウントしない方向でいてくれた。

ボールは、海東持ちだ。

「どうする? 一人気絶してるし、左君と小野寺君がアウト……」

「あと一人当たる代わりに二人戻ってこられるが……」

「横当てがなくなるのは、キツイよなあ」

「しかし子供2人に『もう一度当たれ』も……」

海東・シヨウイチ・カズマ・ソウジの順で会話が形勢。

はつきり言って、リマジチームはユウスケが倒され多分結構キツイ状況なのだ。

「……っていうか、小野寺君いたんだね」

「前回、まったく見る影なかったしな」

「ユウスケだし……」

「とにかく、今変身している龍騎をどうにかしない限りは……あれ、海東。ボールは？」

ソウジに言われ、海東は自分の手にあるはずのボールを見る。

……なんとそれは、スイカに掘りかえられていたのだ。

しかもよく考えれば、【あと一人いるはずの相手】がいない……

「……え？」

「ま、さ、か」

「——ぎゃああああああー!!」

バツゴオオオオン!

……そんな壮絶な音が鳴ったかと思えば、城戸龍騎が倒れている。しかも鉄仮面が……少し、というか1cmほど凹んでいた。照井は笛を吹いた後、アウトを申告。

「……城戸真司、出る」

「いつて…つか、今顔面だつたる…」  
「俺に質問をするな！」

何気に話を通じないように思えるが、——【変身中は顔面も判定】  
というのがこのルール。

城戸龍騎は泣く泣く、場外になった。

そして…

コートを中心では、その龍騎を倒したリュウガ……ならぬシンジが  
笑顔でボールを拾っていた。

「………龍騎は一人で充分だ」

「自重してくれシンジイイイイイ！」

「駄目だ、——お前…龍騎よりリュウガ、或いはタイガに選ばれ  
るべきだろおおおー！！」

暴走するシンジに、カズマが涙ながらに叫び……シヨウイチは、吼  
えていた。

「…痛かった…変身してるのに、鉄仮面なのに痛かった……！ソウ  
ジさん、あいつ本当に俺の平行ル！？」

「——俺達も悩んでいる所だ」

## 6話【赤い悪魔】（後書き）

遂にシンジによる被害者が出ました。  
しかも龍騎。

これで、どちらも後一回当たれば最初の外野が戻ってきます。  
しかもまだ【笑いのツボ権】が残っているため…どちらも油断できませんね。

まさかの援軍は、照井。

いや、絶対ディケブラで出せないなーと判断したもので（笑）  
予想通り話がかみ合ってます。

…が、フィリップ君よりは仕事します。

さて、DCDチームは次の被害者が分かりきっており、平成チームは良太郎が当たらないため誰が当たるか分からない状況。  
どうなっていくことやら。  
それではっ。

## 7話【海東大樹、死す】（前書き）

### 配置構成

平成チーム

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × 変身中

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓復帰

尾上タクミ × 変身不可（ 気絶中）

ソウジ

海東大樹 変身不可

左翔太郎 ×

< 外野 >

ワタル

アスム

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 7話【海東大樹、死す】

超危険人物・シンジにボールがワタル……じゃなくて、渡る。

「クウガカブトブレイドディケイド電王、……うん、ブレイド狩るか」

「ヴェエエエエツ！！？」

「シンジ、テメ、——何気に俺への宣戦布告だろそれ」

カズマはギロリと睨みつけつつ、シンジに言う。

「今、リマジ陣地にはシンジとカズマのドス黒対決が行われたりとかそうでなかったりとか。

ちなみに海東は、なるべくソウジから距離を取っていた。

「……」

「どうした海東？」

「また盾にされたら敵わないからね……」

「だがインビジブルは使えないぞ」

ソウジからのごもつともな発言に、海東は落ち込んでいた。

——変身権は、ディケイドドッジの猛攻への対抗策として既に使ってしまった……

インビジブルで逃げようにも、逃げられない。

……最も、逃げたらその地点でもれなくソウジが追いかけてくる。

オリジチームも、コソコソと話し合っていた。

変身したばかりの龍騎が、あっけなく外野行きになるほどの破壊力を持ったボール……

その片鱗を受けた天道が、士や五代、剣崎と話し合っていた。

「……あのワーム、いや、進化したネイティブは……一筋縄では倒せないぞ」

「くそっ、レンでも来てくれれば……あのミラーモンスターか魔化魍かファンガイアかイマジンかアンノウンかオルフェノクかドーパントか分からん、人類の進化系は倒せない」

「彼、新しいグロンギなのかな。まさか、ダグバと同等の……」

「……上級のアンデッド……それも、第二のジョーカーともいえる存在だったりして……」

（（（もはや人間扱いすらされてねえ……）））

シンジをもはやモンスターと同等、いやそれ以上に思っている天道達。

「流石に元が人間なドーパントはねえよ」と翔太郎、「じゃあ何フエノクだよ」と乾、「むしろアヤカシ……」とユウスケは呟きながら、シンジの存在について大いに悩んでいた。

とにかく、シンジを止めなければ。

そう思った士は、津上に大声で叫ぶ。

「——津上！【笑いのツボ】権だ、それでシンジを封じる……！」

「え？あ、分かりました。審判さーん、【笑いのツボ】権を使いた  
いんですがー」

「俺に質問をするな！」

「『聞けよ！』『聞けよ！』」

乾・翔太郎・ショウイチが叫ぶ。

この審判、かなり難癖があるようだ…まるで話が通じない。

アスムは遠い目で照井を見ながら、しかしどこか懐かしさを感じて  
いた。

「……なんか、あの人とは異世界で出会ったような気がします」

「あ、そういえば俺もカズマとは…」

「最悪なことに、僕は…直接の関わりはないだろうけど、——辰  
巳シンジという名の全惑星の破壊者と似たような存在を知っている  
ような」

「……ソウジ、そういえば…お前が歌舞伎役者やっている世界でも、  
会った様な気が」

「それを言い出したら、……俺…シンジと一緒にどこかでホストや  
ってたかも」

「……俺はあのヒビキとかいう奴と、面識があるようなそうでもな  
いような」

アスムだけでなく、ユウスケ、海東、土、城戸、ショウイチが“こ  
ことは違う自分”の記憶を遡っていた。

何気に、シンジの知り合いが多い気もするが。

とにかく、話の分からない照井の代わりに…亜樹子がルーレットを  
持ってきた。

ルーレットの登場に、士達は首を傾げる。

だが…

そこで乾が、思い出したように呟く。

「——待てよ。そういえば、相手の選出方法もルーレットじゃ…

…」

「「えええええ！？」」

「ちよつと待て。じゃあ、……運が悪ければ外野にいるユウスケ達に誤爆する事も！？」

「ええーっ！？」

… マジか…

誰もがそう思いつつ、だが無情にも津上がルーレットを回す。

「じゃあ、いきますよー！」

「……シンジシンジシンジシンジ……！」

「龍騎龍騎龍騎龍騎龍騎……」

「最悪、ショウイチ…ソウジ……」

「ユウスケに当たるな……」

「「「ユウスケに誤爆しろおお！」」」

「Σ同時変身のなかったリイマジ4人（＝ソウジ・ショウイチ・カズマ・シンジ）が酷すぎる……！」

それぞれの思いを乗せたルーレット。

その結果は…

—— F A - F A - F A - F A I Z ! !

「「「あ」」」

「ファイズ…ってことは、タクミ君だねー」

「ごめんなさいタクミ君…。——笑いのツボッ！」

夏海が、気絶状態のタクミに笑いのツボを放つ。

その一発で目覚めはスツキリだが、タクミは地面でのた打ち回る…  
と言つか、笑い転げていた。

「あつ、…あははははははははははっ！！？」

「「「最悪だああ！！」」」

「いいツボだな、感動的だな、——だが無意味だ」

海東の兄のような事を言いながら、シンジがフェイント一発。  
オリジチームには不幸中の幸いか、それは良太郎の顔面にシュート。

すかさず天道はそれを取り、遠慮なくシヨウイチ狙いで投げる。

「……ふん！」

「おっと！？」

シヨウイチがすかさずかわすが、ボールは背後の乾に渡る。

今なら、背後がから空きだ！

…そう思ったが、乾は剣崎目当てのパス。

「へっ?」

「剣崎、龍騎に投げろ! 変身タイムが後少ししかない」

「あ、そうか!——真司、第二のジョーカーは無理でも最低シヨウイチさん当ててけ!」

明らかに、【第二のジョーカー】と発言した剣崎。

彼の明日は果たして…

そんな事はさておき、高く投げられたボールに合わせる形で城戸龍騎はファイナルベントカードをベントイン。

<FINAL VENT>

「いっけええええええええっ!」

これが当たれば。

しかしそんな希望は、はかなく崩れ去っていく。

——カズマとソウジが同時に足蹴にした、海東によって。

「よし、お前が行け」

「この薄情カブトムシコンビーツ!」

「どわっ!」

海東はシヨウイチにぶつかり、シヨウイチが倒れる。

一方の海東はというと、ドラゴンライダーシュートを食らって軽く三回転しながら倒れる。

「オウノーッ!」

「……海東大樹、出る。そしてワタルとアスム、並びに城戸真司入  
れ」

（こんな形で、あのメンバーの中に入りたくない……）

「ししょーッッッ！！？」

まあ結果が分かりきっていた、海東の脱落。

ボールは海東に当たって跳ね返ったところを、カズマが取った。  
オリジチームは既にいる5人を含め、城戸が帰ってくる……

果たして、この勝負の結末やいかに？

そして、次なる被害者は……？

「——海東、その身を呈してまで俺を助けてくれた……お前のこと  
は、2分間だけ忘れない」

「2分後はどうでもいいのかよ！……って巧、お前何してるんだ？」

「……あーもしもし？」

「お前本当に何してんだああ！？」

7話【海東大樹、死す】（後書き）

タイトルは盛大にフェイク。

いや、だってドッジボールですし死にはしませんよww

海東は一応、響鬼の世界では好きですよ？（何その限定ぶり）

影の薄いユウスケだった、クウガの世界やアギトの世界では好きです（いや、だから…）

タクミ君はあの個性強い面々の中では、明らかに浮きそうなタイプですね。

盛大に笑いのツボの被害に遭いましたがww

その一方で、乾巧がなにやら仕出かした様子…

ああ、でも、照井よりは出番が先送りにならないので警戒しなくていいですよ（笑）

それでは！

## 8話【城戸真司、その奇跡】（前書き）

### 配置構成

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

D C D チーム

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓復帰

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 ×

< 外野 >

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 8話【城戸真司、その奇跡】

現在、内野は6VS6という僅差…

オリジチームは、土・剣崎・城戸・天道・良太郎・五代という、若干1名顔面ばかり当たるある意味で不幸な人物がいるが…申し分ない組み合わせ。

「よし、このまま押し切るぞ！」

「ああ！」

「つしゃあ！」

「任せる。俺は天の道を行く男だ」

「せ、精一杯頑張ります…」

「よしっ」

一方のリマジチームは……

「つーぶせ、つーぶーせ、りゅーきーをつーぶーせっ」

「……そんな事言ったら、俺はお前をすかさず狙うぞ」

「カズマ落ち着いてください」

「だが、——ガチで城戸は潰せ。何なら良太郎狙いで49話を再燃させてやれ」

「それか土」

「シヨウイチさんやソウジさんも落ち着いてください……」

……もはや大ショッカーの頂点に居かねない魔王・シンジ、魔王に

唯一蹴りを入れた男・カズマ、容赦なくヒビキを鎮めたベルトむしり・ショウイチ、海東を盾にする暴拳を見せた男・ソウジ。間のワタルとアスムだけが、もはや、リマジチームの生命線。しかし。

「——ですが城戸さんは狙っていきましょう。師匠の仇です」

「それを言ったらソウジさんとカズマが真の敵になります。……」

僕はとりあえず、あの人の逃げる様を見たいので……」

「「お前らもまともじゃねえええーッ!!」「」」

復讐に燃える鬼と、ドSが光臨した王子。

……リマジ陣営、こんなばかり。

ストップパーとも思えるユウスケ・タクミ・翔太郎が外野なので、仕方ないといえば仕方ないのだが……

とにかく、カズマは思いつきり城戸狙いでいく。

「よっしゃあ!……シンジへの恨みつらみをぶつけてやる……あとチーズの分も!!」

「でええええー!!?ちょ、土の分は土にしるよーッ!!」

そう叫ぶ城戸。

——しかし彼も、でんぐり返しでカズマのボールを巧みに避ける。それを受け取ったユウスケが彼を狙うが、城戸はでんぐり返しをした体制のままジャンプしてかわす……

「とうっ！」

「…あの人ももう人間じゃないっ!？」

「どうして『しんじ』はバケモノ揃いなんだろうか」

「——だったら、こっちも【笑いのツボ】権だっ!！」

シヨウイチが、声を張り上げる。

しかしこれは、城戸にうまく当たってくれるか分からない…

大抵こういうのは良太郎に当たってしまうため、最悪、良太郎のいるうちは避けたかった。

だが、それでもしないと奴は止められないと誰もが判断したのだ。

「じゃあ、ルーレットいくよー!とおりやー!！」

「「良太郎良太郎良太郎ッ!」」

「およー!？」

「っこらー!その自意識過剰コンビ、良太郎呪ってんじゃねえええーッ!！」

「城戸さん失せろッ」

「シンジ、あくまでお前のオリジナルだからなっ!？」

乾、土と天道に激しいツツコミ。

翔太郎も、魔王<sup>シンジ</sup>に鋭くツツコむ。

しかし…

—— R Y U - R Y U - R Y U - R Y U K I ! !





「やって見なくちゃ分からないだろ！フィリップ、お前はルナだ！  
！」

『はいはい』

<ルナ！メタル！！>

ダブルは、ルナメタルに変身する。

ボールを拾ったのはアスムで、彼も子供とは思えない剛速球で城戸を狙う。

「てやああああ！」

「ぎゃーはははははっ！！？」

但し城戸、今度は空中ジャンプしてその場で両手で両足のつま先を掴み、『O』の体勢を取る。

ボールは見事に、そのど真ん中を抜けていく…

城戸は地面に着地する際にブリッジ体勢を取り、そのまま着地した。

「『メタルイリュージョン！』」

遂にメタルイリュージョンを放つダブル。

メタルシャフトでボールを弾き返した後、更に金色の輪っかが城戸を襲い掛かる…

それを見た土は、流石に照井に講義した。

「おいつ、あれはいいのか！？ボールですらないぞ！」

「……俺に質問をするな！」

「「だああああ！フィリップ以上に使えない審判だああああ！！！」」

士と外野の乾、シンクロした一言。  
流石にこれは色々な意味でアウトになるだろう。  
しかし…

「あはははっ…あはははー!!」

ほっぷ。

すてっぷ。

じゃーんぷ。

襲い掛かる金色の輪とボールを巧みにかわし、城戸は奇跡の生還。  
……ただし、ボールはともかくメタルリ्यूジョンで発生した輪  
はすべて良太郎に流れ弾として当たっていたが……

「およよー!？」

「……あれ、アウト？」

「あれがアウトを取られたら、この先シンジが直接ドラグクローを  
使っても…カズマがディアーサnderを使ってもアウトになるぞ」  
(何でそこでリイマジ限定なんだろう…)

明らかに罪のない良太郎へのダイレクトアタックに、津上や乾が話  
し合い、渡は例題に出されるリイマジの恐ろしさを垣間見ていた。

そんな時だった。

ダブルの変身タイムが残り20秒というところで、乾が呼んだ人物が来たのは。

「——どうも、【BOARD】社員食堂からの差し入れです」  
「乾さんに頼まれて、弁当を作ってきました！」  
「皆さん、昼食をどうぞ！」

突然やって来た、【BOARD】のロゴが入った車。  
そこから降りてきた女性三人に、カズマが驚いて叫んでいた。

「あれっ、アイさん！それに、マイさんにミーさんも！」  
「……もうそろそろ昼食の時間だしな。これから一番近かったのはお前の所の社員食堂だったから、作ってもらうよう頼んだんだ」  
「丁度いい。食事にするか！」

殺伐とした状況を打破した、昼食タイム。  
しかし、この昼食時間でも波乱が起きることになるうとは……この時誰も知らなかった。

「——ってか、乾さんどこで電話番号を？」  
「いや、前に行ったことあったからさ」  
「Σええっ!？」

## 8話【城戸真司、その奇跡】（後書き）

たつくんが呼んだのは、弁当タイムのため。

…しかし、なんでブレイドの世界の【BOARD】の番号を知って  
いたんだかww

ファイナルステージでは、ファイズフォン悪用（笑）で料理の予約  
をするファイズがいたみたいで。

そのオマージュというか、パロディというか、そんな感じでした。  
とりあえず、尾上君は思ってもやらなさそうでした↑

城戸はもはやありえません。人間として。

絶対、リュウガと合体してますよアレ↑

そして良太郎が別の意味で不幸ww

それではっ

## 9 話【キバの王子の策謀】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓ 復帰

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 後半戦開始20秒変身可能

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 9話【キバの王子の策謀】

乾のお陰（？）で始まった、昼食タイム。  
やっと昼食にありつける。  
そう思ったその矢先だった……

「——あれ？ちよつ、ちよつと三人とも……」

カズマが何かに気付き、アイマイミーを呼ぶ。  
一体どうしたものか、と思いながら士達はその様子を見ていた……

「あの、これ数が足りないんだけど」

「えっ!？」

「そんなぁ!」

「ちゃんと数通りですよ!？」

「ああ、ちゃんと人数分はあるんだ。」

——そう…ドッジボールに出ていた人数分は」

カズマの衝撃的な一言に、全員数を慌てて数える。

しかし、明らかにここにいる人間の数と弁当の数が合わない…  
「どういうことだ」と、土は乾に講義する。

「なんで弁当が足りなくなるんだ!？」

「いや、俺はただ『人数分揃えてくれ』って頼んだだけだ。……電  
話を受けた相手も、人数は把握しているから任せろって」

「…それ、誰だったんだ？」

「……黒葉ムツキ」

「——ムツキあんにやろおおおー!!」

カズマが怒鳴る。

だが、怒鳴ったところでどうにかなる問題ではない。  
そこで、「そうだ」と海東が非情な一言。

「…試合をしていた僕達を優先して、他の人達は弁当抜きとか」

「そんなの嫌です!」

「そうよそうよ!」

「僕に関しては、審判もしていたしダブルにも変身していた。僕は  
ちゃんと貰える権利があるはずだ」

「俺もわざわざ警察の仕事を放つてまで、審判をしに来たんだ。  
…弁当は貰うぞ」

「…お前は役に立ってねえよ!!」「」「」

夏海や亜樹子、フィリップの文句はさておき…

照井の一言には、全員が叫んでいた。  
ただし。

——平然と弁当を食べていた辰巳シンジ、彼一人を除いて。

「むにゃもらむむ（訳：ケンカするなよ）、むにむー（訳：大人気ない）」

「……お前はなに食ってんだああああーっ!!」

カズマ、懇親のカカト落としがシンジの後頭部にヒット。

そのせいで、頬張っていた白ご飯が派手に噴出したが、それはさておき。

問題は、——これで残る弁当が19個になってしまったこと。  
抜け駆けをしようにも、既にカズマ+非参加者4人が目を光らせている…

「——チィーズウー…」

「つーかーさーくーん…」

「しょーたるーくーん…」

「翔太郎…」

「門矢に左……」

「……分かった、分かった。じゃあ、フェアに対決という」

「そうだな。——もう既に食べてるシンジはさておき…残り23人で19個の弁当を取り合う、ってか」

抜け駆けする3秒前だった土と翔太郎だが、見事に阻止され流される。

他のライダー達も「しょうがないか…」と諦めムード全開だった、その時だった。

「…あれ、弁当が18個しかない」

改めて数を数えていたソウジが、声を上げる。  
彼の言葉に、全員が疑いの目でシンジを見る…

しかしシンジは、卵焼きを食べつつ首を横に振っていた。

「…「テメエか魔王シンジイイイイ!!」」「」

「むーうー（訳：違う）」

「辰巳はここから動いてないし、弁当は一つしか食べていない…それは俺が証人になる。ずっと見ていたからな」

「…「だつたら止めるや!?!」」「」

照井もシンジのアリバイを証明するが、…ショウイチと乾、翔太郎の意見は最もだった。

だとすると、一体誰が…

「こうなったら」と土は何処からともなくシャーロックホームズの衣装を取り出し、それに早着替えをしてやる気を見せる。

「——犯人を見つけた奴は、問答無用で弁当を得られるルールで行くぞ。…犯人は見つけ次第、変身してフルボッコしてもOK!」

「…「おおおおーっ!」」「」

……もはや、ドッジボールが関係ない展開。

一人だけ食い扶持を得たシンジは、とりあえず面白がってカメラでその様子を撮っていた…

「まず、一番疑わしいのは…数を数えていたソウジだな」

翔太郎が、ソウジに疑いの目を向ける。

しかし彼なら、数え間違いと偽り弁当を隠すこともできたはず…だが、そのアリバイはショウイチとタクミが証明した。

「悪いが、ソウジには一切不信な動きはなかった。俺とタクミが近くに居たからな」

「それに僕も、ちゃんと数を数えましたから…数え間違いもないはずです」

「うーん、ソウジはシロかあ…」

「常時クロックアップも含め、ありえるとは思ってたんだが」

ヒビキと乾が、腕組みをして考える。

士も何かないかと考えたその時、ふとあることに気がついた。

弁当が置いてある場所の後ろには、アイマイミの乗ってきた車…それを見た士は、車を指差しながら叫んだ。

「そうか、——ミラーワールドか！」

「「ミラーワールド？」」

「ああ。ミラーワールドを利用すれば、隙を突いて弁当を盗むことだってありえる。…そして、一番怪しいのは…城戸！」

「俺っ！？なんで！」

「お前は暫く会話にすら出ていなかった…その事を利用して、盗んだ可能性だってありえる！」

「はい、質問」

ちやつかり飯を得たシンジが、土に意見する。

「ミラーワールドに行くには、一回仮面ライダーに変身しないといけないんだけど」

「ああ。だから、ライダーに変身して」

「でも、ライダーに変身してミラーワールドを通ったにしても、弁当を盗んでから変身を解いて食べる時間なんてないと思うんだけど」  
「「「あ」「」」

シンジの挙げた問題点。

それは、ミラーワールドを通るには【そこを通れるライダーに変身する必要がある】こと。

… いちいち弁当を盗って戻って食べていたのでは、普通にばれる危険もある。

ミラーワールドに一旦放置、とも考えたが…

そこにはミラーモンスターしか長く存在できない事を考えると、弁当は今頃消滅している可能性もありえる。

「——ミラーワールド内で食べる、という発想は？」

「【仮面】ライダーなのに、普通に飯食べる？」

「「「だよな」「」」

まさか抜け駆け犯にここまで言われるとは。  
そう思っていると…

「じゃあ」とシヨウイチがシンジに質問をした。

「シンジ。——お前はどやって弁当を盗んだ？」

「俺の場合は、ドラグレッター使った」

「じゃあ、やっぱりお前だろおお！」

「俺じゃないってー！」

“ドラグレッターを使った”というシンジの意見に、士は城戸を指差す。

しかし、そこは天道が抑え、士に言い放つ。

「待て。——城戸にそんな頭があると思うか？第一、シンジはカメラのレンズを利用したからドラグレッターを出したんだろうが…あいつは反射物を一切持つていない」

「…それもそうだ」

「そうそ………ちよつ、何か今失礼なこと言わなかった!？」

天道の失礼な一言はさておき…

ワタルがふと、一言呟く。

「——でも、弁当のお勧めって何だったんでしょうねえ…」

そんな事を言い出した彼の呟きには、誰もが首を傾げていた。  
…ただし、シンジと海東を除いて。

「あ、それだったらフライがおいしかったけど」

「そうそう。あれはいい味だったよ。特にクリームコロッケが…は

っ！」

「……師匠。なんで、【シンジさんしか知らないはず】のモノを師匠が知っているんですか」

アスムが音叉を手に持ち、変身態勢に入る。

一方でワタルも、キバットを手に持っていた……黒い笑み込みで。

「……まさか、簡単に掛かるとは思いませんでしたよ」

「師匠。——ミラーライダーを出して盗ませましたね……？」

「いや、その、つい、……わあああああー!!」

海東がこの後、子供2人に足蹴にされたというのは……言うまでもない。

「……弁当1個、ワタル行きだな」

「……渡。お前のリイマジ、策士って言うか……腹黒い」

「……否定できません」

## 9 話【キバの王子の策謀】（後書き）

タイトルはラスト付近。

… 実はアスムか迷ってましたww

シンジはちゃっかりしてますとも、ええ。

でもカズマさん、せめて中のモノをすべてなくした状態を見計らって蹴ってください。

次回はドッジボールと関係のない展開が続きますww  
それではっ



フィリップ「翔太郎！やめろ、翔太郎ーッッッ！」

天道「…くそつ、状況はどうなっている」

剣崎「ヒビキさんに渡がやられた…くそつ…！」

士「だが、仲間を失ったのはあっちも同じ…一気に畳み掛けるぞ！」

城戸「俺は、俺は…うおおおおおーっ！」

海東「ここまでのようだね。…後は、頼んだ…」

カズマ「海東！かいとおおおおーっ！！」

ショウイチ「くそつ、俺なんかを助けるために…なんてことだ…！」

ソウジ「…せめて彼のことは、忘れないでおこう…それが、彼への弔いだ…！」

シンジ「さあ…」

士「お前達のタイムリミットを…」

士・シンジ「「数えろ！」」

## 10話【真の破壊者】

「——って、チガウ違うちがーう!？」

ユウスケが、全力でツツコミを入れる。

そして、そのまま土に詰め寄りつつ訊ねていた。

「なんか、シリアスすぎてドッジボールでもギャグ小説でも関係なくなってきたくないか!？特にお前とシンジさん!！」

「何を言う。大体合ってる」

「大体間違ってもいるけどな!？」

ぎゃあぎゃああと大騒ぎする、仲のいい夫婦(?)

しかし…

そんな彼らを気にしてられないほど、五代達は困っていた。

「……残りの弁当は、ワタル君にあげた分を引いて17個か…」

「これは…大変ですねえ」

「素直に犠牲になってくれる奴なんて、いないだろうし」

「皆食べたいだろうしなあ」

「ウェイ…」

「んー、確かに【腹が減っては戦はできぬ】だもんね」

「その通りだ」

「そう、ですよね……」

「はい……」

「…カズマ、あと4個発注できるか？」

「いや、この時間はいつも忙しいから……頼んでも遅れるよ絶対」  
「そうですか……」

「師匠が抜け駆けするからややこしくなっ たんですよ」

「シンジにも原因はあるけどな」

「——正直、誰からも恨みっこ無しなのはワタルだけだよな」

「何でもいいから、食べたいです！」

「そうよー！」

「さっさとしてくれないかな」

「俺を待たせるな……！」

真剣に話し合うオリジ・リマジだが…夏海達は文句炸裂。

——お前らがコンビニやファミレスで済ませてくれば済む話なんだ  
よー——

…翔太郎はそう思っていた（しかも内三人は知り合い）。  
すると…

「ん？———そうだ、足りなかったら分け合えばいいんだ！」

ユウスケが、最もな発言をする。

確かに分け合い精神なら、もっと早くに終わっただろう…  
しかし。

……それを破壊してくれたのは、士だった。

「何を言う！……他人と分け合ったら取り分が減る！！」

「……そんな事言ってる場合かー！！」

「士君！怒りますよ！？」

「チーズ……チーズには俺特製の、『ロイヤルストレートフラッシュ・シンジといっしょ版』を食らわせようか？——ってなワケで剣崎さん、カードとラウスアブソバー」

「城戸さんSURVIVE烈火プリーズ♪」

——ロイスト・龍騎サバイブと一緒にバージョンって、どんなんだよ……

誰もがそう思いながら、破壊者<sup>つかさ</sup>に異常な殺気を放つ、悪魔<sup>カズマ</sup>と魔王<sup>シンジ</sup>を見ている。

……一応、ユウスケを除いたリイマジの中では結構長く士と一緒に居た2人だが。

「とりあえず、……その…ロイヤルドラゴンストレートファイアーフラッシュストーム？はどんなのなんだ……？」

「……ソウジさん何訊いてんの！？」

「つか、そこまで言ったら大方予想がつくだろ……！」

「ダ、ダメダ！ゾンナゴドノダメニ…ガゼルハズガナイ！！」

叫ぶユウスケ達と、拒絶する城戸・剣崎。

とりあえず、本当に【RDSFFS】が発動する前に、士も素直に

弁当を分け合う事に……

だが。

弁当は（この中で一番期待できる）タクミが、軽量機で重さを測つてまで公平に分けた。そこまでの細かさに、もはや誰も文句は言えずじまい。

既に弁当を食べた海東とシンジに若干恨みを抱きつつ、皆静かに食べていた。  
すると……

エビフライを食べようとしていた土の所に、夏海がやって来た。

「土君、エビフライとさよりフライ交換しませんか？」

「何？馬鹿言うなナツミカン、俺だってエビフライがいいんだ」

「いいじゃないですか！——言う事聞かないと笑いのツボですよ」  
「……武力行使かよ……」

土は眉を寄せつつも、何を考えたか……輝いた笑顔。  
そして、夏海との交換を呑む。

「ああ、いいぜ」

「ありがとうございます！」

「ただし、お前が先にさよりフライを俺に渡せ。そしたら、俺もエビフライをやる」

「分かりました。——どうぞ」

夏海からさよりフライを受け取ると、土はエビフライを箸で掴む。

そして、夏海の箱に

……入れると見せかけて、0・1秒の速さで自分の口に運んでいた。

「Σああーっ！？何しているんですか、土君！」

「ふああいな（訳：甘いな）！……ゴクン。よく言うだろ、『騙される力二が悪い』ってな！」

「何処の猿蟹合戦ですか！？——さよりフライ、返してください！」

「そうはい神崎士郎！」

意味不明な言葉を言いつつも、土は容赦なくさよりフライを口の中に入れる。

それを見た、夏海は絶叫……

と同時に、翔太郎からも絶叫に近い悲鳴が聞こえてきた。

「——お前らああああー！俺のフライばかり奪うんじゃない！亜樹子はイチゴ返せよ！？」

「いいじゃないか。減るものでもない」

「残してるのが悪いんじゃないよー」

「左、……観念して諦めろ」

「文句ばかり言うんじゃないやねえー！！」

どうやらこちらは、翔太郎が被害者。

大人気ない人間達のバトルに、海東は「やれやれ」と首を横に振る。

「まったく、大人気ないね君達は」  
「お前が言うな!」

乾とショウイチが、どこからともなくナマコを取り出し…海東にぶつける。

ナマコを見た海東は、ディエンドライバーを某バカボンに出てくる警官の如く乱射。

その際、流れ弾がユウスケと城戸にヒットしてしまう。

「ぎゃあああああ!ナマコオオオオ!」

「ぎゃー!」

「だー!」

ユウスケは撃たれてしばらくは衝撃で起きられなかったが、城戸はマトリックスのような避け方を披露。

しかもディエンドライバー乱射は続き、最悪…天道の食べようとしていたクリームコロッケを、打ち抜いていた。

「…おばあちゃんは言っていた。…食べ物に銃を撃つような輩は…生きる価値がないとな…!」

「おばあちゃん怖っ!」

「絶対お前の言葉だろう、それ…」

天道の言葉に、渡とソウジがツツコミを入れる。

しかも、天道もカブトゼクターをキャッチ…そのまま、剛速球で海東にそれを投げつけていた。

「おばあちゃんが見ているアタック!」

「…何それ!」



……安全だったのは、事前に騒ぎの場所から離れていた7つの世界の皆様方。

ユウスケは静かにタッパーに（台無しになったタクミの分の）弁当を入れながら、呟く。

「タクミ君って、一番怖いんだな…多分、……シンジさんの本気モードよりも…」

「…大人しい子ほど、何とやらだな」

「流石に、狼のオルフェノクだけあるな…」

「人の皮を被った獣、ですか」

「あれ見た後だと、否定できないよな…」

ソウジが、シヨウイチが、アスムが、カズマが。

……タクミについての恐ろしさを語りながら、【お供え物】という名の余り物を詰めていた…

「あ、乾さん、これ返しますね」

「…ああ…それと、リマジに強化武器がない理由が分かった。……お前らに持たせたら、全てにおいて危なすぎる」

## 10話【真の破壊者】（後書き）

この物語は、テイ。ズ風に言うなら

【リイマジの恐ろしさを知るRPG】

…ですかねww

リイマジの、というよりタクミ君の、ですが。

遂に切れました。

大人しい子ほど、切れると怖いですね↑

元から怖いのもいますが…

ちなみに、【ロイヤルストレートフラッシュ・シンジといっしょ版】  
は…

想像してはいけない産物です。

そしてリイマジが【ケータッチで最終フォームになった】という事  
実に心から感謝しましょう。

本来の製法で行ったら、大変危険です↑

次回こそドッジボールができればいいな！  
それではっ。

11話【だが俺は謝らない】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓ 復帰

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 後半戦開始20秒変身可能

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 11話【だが俺は謝らない】

「——まったく！まさかファイズブラスターが来るとは思わなかったぜ」

士は埃を払いながら、文句を言う。

彼だけではない。海東、夏海にオリジナル全員…タクミの攻撃によって炭と化していた。

勿論、ダブルの4人も例外ではなく。

…というか、こっちはフィリップだけのうのと生き延びていた。

「流石に、最強フォームだけある。威力もかなりのものだ」

「ねえ翔太郎君…どうしてフィリップ君だけ、煤にならないのかな」  
「俺が聞きたいっての…」

「…城戸真司並みの遅しさか、それとも…」

ちなみに、照井すら絶賛する城戸真司。

——彼は、ファイズブラスターを真正面から受けたにもかかわらず、髪の毛が少し焦げただけですんでいた。

「ひー、危なかった…」

「……城戸さん、その遅しさはどこから来るんですか？」

「…おばあちゃんは言っていた。…【城戸は理不尽だ】と」

「いや、明らかにそれお前の言葉だろ！？お前のばあちゃんが、城戸を知ってるわけないだろ！」

アフロになっっている渡に天道、なんでもかんでも『おばあちゃん』で済ませる彼にツツコミを入れる乾…

だが、その理不尽さは…

……どこか納得がいく。真っ黒くろすけになったオリジナル全員、そうだった。

「とにかく、もう弁当食べ終わっただですよ？試合再開しましょう」

ファイズブラスターをいそいそと片付けるタクミ。

…自分が何をしたか覚えてないのか、あのワンコ…

士はそう思いつつも、汚れを全て払いのけ…試合再開させる。

「まあ、いい。試合再開だ」

「そうだな…」

「だったら翔太郎、変身だ。——中断したお陰で、変身タイムがまだ20秒残っている」

「…だったああああッ！」「」

すっかり忘れていた、ダブルの変身タイム。

それを聞いた翔太郎は、

——もはやシンジと大差ないほど狂っていた。それほどもう一人の『しんじ』が憎いと言える。



リが飛んでくる。

まさか。

そう思った士は、全員に叫んだ。

「まずい、エクストリームの力を使う気だ！ガイアメモリ4本分のパワーなんて、受けたら城戸でもただでは済まされないぞ！！」

「ええっ！？」

「ちょ、それ反則！反則だからっ！？」

「いや、でも、……変身ありだし……」

「およろし！」

「こうなったら……！」

ワタルがボールをパスしようと、高く投げる。

それを見た天道は、『チャンスだ』とばかりにカブトに変身。

そして、ハイパーゼクターを使い、ボールを取るために羽を広げた。

「——はっ！」

「うわっ、取られた！？」

「安心しろ、貴様らには打たん……」

俺が討つのは……

フィリップ  
——変身元だッッッ!!」

そして、そのままカブトは空中からのシュートでエクストリームメモリが回収しようとしていたフィリップの体を、遠くまで弾き飛ばす。

その高さ、……300m。  
飛距離に関しては、……2km。

『僕の体ああああっ!?!』

「おい、汚いぞ天道!」

「おばあちゃんは言っていた……【勝負に卑怯もラッキョウもない】とな!」

「それシザースの言葉だし」

天道カブトのボケに、鋭く言葉の刃を立てるシンジ。

ボールは慌ててユウスケが取りに行くが、取りに行つて戻った頃には既にダブルの変身時間が過ぎる。

結局何もできずに終わった翔太郎

……だが、照準は完全に天道に変わっていた。

「よくも俺の相棒を…許さねえ!」

「フッ、やれるものならやってみるんだな」

「とりあえず、当てていくか!」

「そうはい神崎優衣!」

ユウスケがボールを投げる。

だが、それはあっけなく土に取られる始末…

ユウスケのあまりの酷さに、遂に【特攻毒舌機・W】が動いた。

「――役立たず」

ワタルの冷たい言葉と視線が、ユウスケにクリティカルヒット。  
しかし誰も不憫と思うことはなく、ユウスケは一人でいじけていた…  
その間に、土は思いつきりボールを投げる。  
当てようとする行為は別にいい。  
いいのだ。  
そう。

……カズマじゃなければ。

「ぎゃあああーっ!!?」

ばつきょーん。

そんな効果音付きで、カズマにボールを当てた土。  
だが、その瞬間…敵<sup>ライマジ</sup>からも味方<sup>オリジ</sup>からも責められてしまった。

「『このアホおおおー!!』」

「土、お前…大体どころかまったく分かってないだろ!?おい!」

「ゴノヨノオワリダアアアア!」

「うわぁ…」

「士さん、最低です」

「何で二度もカズマを当てるんですか」

「対シンジ対策はどうしたあああ！」

「…士…もうお前、すべての責任を負ってカズマに当てられる。な？」

何人かが叫び、乾が吼え、剣崎が泣き、渡が侮辱の目で見、アスムとワタルが責め、ショウイチが怒鳴り、ソウジが諭す。

しかし、この状況になっても士、まったく気に留めていなかった。

「ああ、この件については俺が悪い。だが、俺は謝らない！何故なら、当たるほうが悪いからだ！！」

「「「おつまあああああー！！」」」

この瞬間、誰もが思った。

——誰かこの破壊者<sup>バカ</sup>当てろ、と。

「つ、士のアホ…orz」

「ふふふ、…うふふふふふふふ」

「チイイズウウウ…！！」

11話【だが俺は謝らない】（後書き）

士のバカww

今回はカズマの反撃とシンジの怖さで皆板ばさみ確定です。

エクストリームⅡ城戸すら危ないってどれだけ危険視してるんですか。

そして天道がもう分からない。

とりあえず、今回翔太郎とフィリップがめっちゃくちゃ狂ってます。

結論：烏丸所長のあの名言は、時と場合によっては反感食らうよね。

それでは！

## 12話【さらば、シスコン】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司 変身中

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 変身不可

<外野>

津上翔一

乾巧

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ

剣立カズマ × ↓ 復帰 ↓ ×

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 変身不可

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 12話【さらば、シスコン】

まったく反省の色のない士。

しかも彼は、某テイルズの某レプリカのような事を言い出す始末…

「俺は悪くない！俺は悪くねえッ！！」

「……っーかさ！」「」

「ああもう、ナツボンタン！お前、【笑いのツボ】権とかどうでもいいから…殺れ！！」

「殺すんですか！？それとショウイチさん、ナツボンタンって何なんですか！！」

「そうだ。——ナツマロンだ」

「Σ栗でもないですよウジさんッ！？」

「じゃあ、マツボタン！」

「ヒビキさん…もう、『ッ』しか合ってませーん！！」

怒鳴るユウスケ達をよそに、漫才をする夏海＋年長組。

「…効いたよ…」

「フィリップ君！」

「大丈夫か、フィリップ」

フィリップはボロボロになった体でありながらも、何とか戻ってきた。

そして…

自分を狙った天道に対し、【地球の本棚】による精神アタックを試みた。

「ああ、大丈夫だ亜樹ちゃん、照井竜。——それよりも…僕はこれから、対天道総司のための検索を行う…邪魔はしないでくれ」

「は、はい」

「分かった…」

「フッフ、天道総司…この退屈な罵り合いが終われば…君は終わる」

フィリップの気迫に押され、頷く亜樹子と照井。

…正直、冴子と若菜の黒さが伝染しつつあるフィリップなのであった。

しかし。

「らんらんらんらんらん、らん、らんらんらん」

某ジブリの王蟲の歌を口ずさみ、シンジがボールを手に取る。ようやくリミッターが解除されたあの男に、誰もが畏怖した。

「「「出たああッ!?!」」」

「逃げろっ、いや、…土を盾にしろーッ!?!」

「「わああああああ!」」

事実、金剛像のような恐ろしい顔でボールをまわすシンジ…もうあれはリユウガですらない。

——もう、テラーでいいのかもしれない。  
しかし、この時誰もが気付かなかった。

リイマジ側に、もう一人テラーがいたことを。

「——シンジ…渡せ……。……チーズに当てる…ぶち当てる、つか、ぶっ潰すぶっ倒すぶっ殺す」

… カズマだ。

しかし、シンジは金剛像の顔そのまま首を横に振る…

「……やだ」

「いいから渡せ」

「やだ」

「渡せ」

「やだ」

「渡せ」

「やだ」

「……渡せって言ってんだろおお！！」

「やだつつつてんだろおお！！」

遂に大喧嘩を始めた、テラー二体。

收拾のつかなくなった事態に、ショウイチは爆弾処理班が持つような盾を取り出し、ワタルとアスムはその後ろに避難し、ソウジはクロックアップの世界に逃げた。

更にタクミもジェットスライガーを呼び盾代わりに、ユウスケと海

東は遠慮なくその後ろに隠れていた…

「……全員退避！いいか、ボールは飛んできても取るな！！取った地点で摩擦によって焼け死ぬぞ！！！」

「……それだけの威力なの！？」「」

「オリジ、お前らも退いとけ！変身タイムとかに拘らないほうがいい、……下手したら！！」

「安心しろ。俺は太陽の男…」

天道がそう言った、次の瞬間だった。

弾丸に近い剛速球が、天道カブトの後頭部に直撃する。

その破壊力に、いくら最強形体ハイパーフォームと言えども……気絶する。

「ゴフッ…」

「……あの自意識過剰…ッ！！」「」

「あ、——天道総司、アウトだ。出る……と言つか、誰か出せ」

「フッフ、成程…彼は3つの頃、原宿で迷子になって……ふふふ、くく、はぁーっはっはっは！」

一瞬でダウトした天道、叫ぶオリジナル達、審判の務めは果たす照井、狂うフィリップ。

しかも、その剛速球を投げたのはシンジだからさあ大変。

……多分、天道は死の境を巡っている頃であろう…

ボールはカズマが取り、彼は脇に抱えた状態でプレイバックルを取り出す。

対するシンジも、カードデッキを構える。

——変身して、直接互いをぶちのめす気だ。

しかしボールをちゃんと持っている辺り、あくまでドッジボールの範疇は超えないらしい。

「おい、ちょ、お前ら!？」

「——変身!」

<Turn Up>

辰巳龍騎と剣立ブレイド、光臨・満を持して（ジーク風）。

士達オリジチームにとって、仲間我で使ってくれるのはありがたいこと

……のはずなのに……

何故か自分達が狩られる気がしてならないのだ。特に、士が。

「しーんーじーこーらああーツツツ!？」

<Tackle>

剣立ブレイドが『タツクル』を使い、ボールにヒットさせる。

しかし、辰巳龍騎はストライクベントを使用…ドラグクローファイヤーで、弾き返す。

<STRAKE VENT>

「…どっせええええええい!!」

「うわー!!」

炎の弾丸は、良太郎の顔面にクリーンヒット。

…『タツクル』上乗せのせいで、良太郎も天道同様に気絶していた。

顔面なのでアウトは取られないが、——ダブルLMの事もあり、つくづく良太郎は不憫な立場にいた。

「こうなったら、」

「…やる」

2人が取り出したのは、それぞれのオリジナルから拝借したラウズアブソーバーとK・Qのカード…そして『SURVIVE烈火』。それを見た剣崎と城戸は、慌てて自分の服のポケットを漁る。

——見事に、盗難されていた。

「…あつれえええ!!?」

「い、いつの間に!?!」

「覚悟しろシンジ、——ついでにチーズ!」

「カズマ倒す…:…:士はついでにぶっ飛ばす」

<Absorb Queen Evolution King>

<SURVIVE>

「おい、俺を巻き込むなッ!!?」

予め言っておこう。

次の惨劇は、2人がそれぞれのライダーに変身して5秒後の出来事…ついでに、5秒の間に良太郎はタックル+ストライクイベントを受けて現在夏海の手当て(=笑いのツボ)を施されていた。

「俺がチーズを倒おおつす!」

<Spade 10 Jack Queen King “Roy

all Straight Flash”>  
「俺が滅ぼす、…破壊者<sup>ディケイド</sup>ですらっ！」  
<FINAL VENT>

5枚のカードが剣立ブレイドKFの前に現れ、ブレイラウザーでそれらを突き破りながら衝撃波でボールを飛ばす。  
更に、辰巳龍騎SVの背後に現れたドラグランザーがバイクに変形、ウィリー走行しながら炎の玉を放つ…  
しかもその間には、

——すべての根源、門矢士がいた。

「おい、ちよつ、…………ぎゃあああああ！」

ズバコン！

…ズギヤアアアアン！

ドウツ、ドウツ！

…バツガアアアアアン！

たった10秒。

その間に、士はボールに当たり、ロイヤルストレートフラッシュを食らい、炎を浴び、……バイクに轢かれた。  
誰もが沈黙する中、照井は真顔で告げる。

「門矢士、アウト。——剣立カズマ、戻れ」

「照井。……それ、無理な話だ」

翔太郎の言う通り…

士は今の攻撃で完全に倒れ、カズマも目の前の相手（『シンジ』）とのケンカが収まっていない。  
士が外野に行ける状態でも、カズマが内野に戻る状態でもなかった。

「…むしろ、鳴滝さん…ディケイドを倒したいなら、彼らに強化武器持たせたらよかったんじゃない」

「海東、思っているとも言っなよ…そんなこと…」

## 12話【さらば、シスコン】（後書き）

もうシンジとカズマが止められない12話。

この分だと、ディケブラで予定している口論がめっちゃくちゃ軽く感じられます（笑）

犯人は確かに士ですがね。

この二人を止めるのは至難の業。

いつか士が言った通り、レンでも来なきゃまずシンジは止まりませんww

さて、変身↓良太郎に顔面シュートをするまでに5秒。

顔面シュート↓士撃破までに10秒。

つまりこの2人の残り変身時間は…

……45秒です。

一人を撃破するのに掛かる時間が早い現状で、どこまで皆耐え切れるか……

それではっ

### 13話【意外な伏兵】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司 × 変身不可（気絶中）

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 × 変身不可（気絶中）

<外野>

津上翔一 復帰

乾巧 復帰

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ 変身中

剣立カズマ × ↓ 復帰 ↓ × ↓ 復帰 変身中（なのに戻ってない）

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 変身不可

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツツコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツツコミ

鳴海亜樹子

フィリップ 試合放棄のための緊急審判

照井竜

### 13話【意外な伏兵】

カブトハイパーフォームとなった天道と、土がやられた。  
これにより、外野の津上・乾も内野に帰還…

しかし、変身時間それぞれ45秒の辰巳龍騎・剣立ブレイドに生き残れる保証は、絶対がない。

——味方のワタル達ですら、だ。

「シヨ、シヨウイチさん。この盾大丈夫なんですか!？」

「何かあればキャッスルドランでも呼べ!」

「……ドランの肉体の一部(＝城壁部分)を抉り取る気ですかっ!？」

「( )がなかったら、危ない内容だな」

正直、対グロンギ&アンノウン用の盾では心許無い。  
だって相手は最凶フォーム。

ユウスケ達も、タクミの呼んだジェットスライガーの後ろに隠れていた。

「…こいつ、いつまでもつかない」

「盾よりはもって欲しいな…」

「無理だったら海東さん、」でも呼んでくださいよ」

「それは嫌だね」

城戸や剣崎、乾に五代に関しては…良太郎の後ろに隠れる始末だ。

「え、あ、あの？」

「…良太郎の不幸体質にあやかろう」

「ああ…」

「頼むぜ、最強の盾！」

「ファイト！」

「頑張ってくださいね！」

皆して好き勝手を言うオリジチーム。

しかも津上翔一、こいつは天然でモノを返す超危険人物だ。  
手前の五代に釣られてサムズアップをする辺り、特に。

一方で、見学者達もリボルギャリーの中に退避。

こうなっては中の状況は観察できない…

かと思いきや、ダブルにはメモリガジェットと呼ばれる探偵アイテムがある。

——そのうちのバットショットで外の映像を写し、スタッグフォ  
ンによってリアルタイムで覗いていた。

「どうどう？フィリップ君」

「何か動きはあったか」

「…誰か死人が出ましたか？」

「ちよつと待ってくれ。…現在、あの2人が変身してまもなく20  
秒……あ！」

攻撃は、シンジからだった。

シュートベントを発動させ、ドラグバイザーツバイを構え、照準を剣立ブレイドKFに向ける。

対するブレイド側も、トリロバイトメタルの力で防御をしていた。

<SHOOT VENT>

「——っおらあああああああ——！」

<Metal>

「効くかあああ——！」

炎の弾丸がドラグランザーから放たれ、体を鋼鉄化したブレイドがそれに耐える。

しかもドラグランザーは、本当に無作為な攻撃を始めていた…

カズマはおるか、その近くに居たジェットスライガー避難組をも巻き込んでいる。

「げっ、こっち来た！？」

「ま、まずっ…」

「当たるよあれー！？」

「うわ！」

タクミは急いで頭を下げる。

翔太郎も寸前にジェットスライガーから離れ、そのまま倒れこむ。

しかし、その瞬間ジェットスライガーの座席部分が破壊…

普通に立っていた海東とユウスケは、クリーンヒットで吹っ飛ばされていた。

「「ぎゃああああー！」」

「うおっ、ユウスケ！えっと、…海東！？」

「そこ、疑問詞混じりましたよ！？一応あの人、今度映画出るんですから！……そう、僕とは一生縁のない場所にまた」

タクミから放たれたオーラに、翔太郎は一步引いていた。

…一体あいつのビギンズナイトは何なんだ…

そんな事を思いながらも、無残に座席が破壊されたドラグランザーの跡を翔太郎は眺めていた。

すると、——ドラグランザーの追撃がやってくる。

「ぎゃー！また来やがったー！！」

「うわーッ！」

今度は4〜5発ほど、向かってきている。

流石にあの近くにいたら、死ぬ…

そう思った二人はすぐに離れ、そして、

——ズガアアアアン！！

ジェットスライガーは、爆発音と共に破壊された。

その後には、煙が燻るのみ。

ここでブレイドも、遂にディアーサンダー発射。

ちなみに今現在、30秒経過…

<Thunder>

「…どりゃあああああああ！！」

「はっ！」

< GUARD VENT >

辰巳龍騎SVも、ガードベントを発動。

まるで炎の竜巻のような防御技“ファイアーウォール” ……

かなりの防御力を誇るが、——その余波は確実に味方にも及んでいた。

「あつっ！？手が焼けるだろおお！」

「…バーニングフォームになれば大丈夫！」

「Σソウジさんあんた、シヨウイチさん殺す気ですか！？」

「駄目ですよ、なれるかどうか分からない人にバーニング強要するのは！」

しかもその後ろのオリジ外野に居たヒビキに紅渡も、ファイアーウォールの炎から逃げ惑う。

ちなみにシスコン2人は、——今もまだ死んでいた。

「うつひゃゝ、何だか凄いいねえ！」

「凄いつてレベルじゃないですよーッ！？」

「…」

ディアーサンダーが、まるで雷雨の雨のように降り注ぐ。

ここまで来ると、シンジもカズマも破壊神どころか世界を破壊に陥れる根源そのものだ。

つくづく、それぞれの世界で鎌田を使った実験をしていた鳴滝が、命知らずすぎる。

…そして、雷はオリジチームの良太郎に全て強襲していた。

「おおよよー!!?」

「「うわーっ!?!」」

「げっ、…本当に全部良太郎が食らった!」

「凄いなあ…」

「ですねえ」

剣崎一真といういい避雷針がいたにもかかわらず、良太郎に全て降ってくるという不運。

しかしここで普通に流せる津上の方が、異常だ。

それに…あの二人、今度はライオンビートとアドベントの戦いを始める始末。

『ギヤアアアス!』

「うおらああああ!」

ドラグランザーと殴りあう剣立ブレイドKF、かなり異常。

もはや、ドッジボールは一転…ただのライダー大戦となっていた。その上変身タイムは残り15秒…

正直、15秒の間に死人は1〜2人出てもおかしくない。

「どうすんだよ!?!」

「それを僕達に聞かないでくれないかな!」

「あああ…どうしよう」

「せめて、一人だけでも!一人だけでも止まれば……!!」

外野の翔太郎達が、どうするべきか話し合っていた。

…その時だった。

空中に浮かぶバットショットを見て、アスムが叫んだ。

「ああーっ！あれだ、あれが使えるかもしれない…！！」

「バットショットでか！？」

「違います、——フロッグポットです！」

「あ。……でもそれで、誰を止めるんだよー！！」

「——とにかく僕に貸してください！このままじゃ全員死にますよ！？」

翔太郎は何か策があるのだろつと信じ、アスムにフロッグポットを投げた。

アスムはなにやら録音をしていたようだが、少し弄った後、音声を再生した。

『おいシンジ、俺の声が聞こえるか』

聞こえてきたのは、羽黒レンの声。

それに反応したシンジは、絶対仮面の奥で輝かしいばかりの笑みをしながら…明るいトーンで周囲を見渡していた。

「レンさん！レンさん！！」

「……止まった！？」「」

「やった！」

「次はカズマさんです！」

「任せろ。——本日使うのは、ジェットスライガーの残骸です。」

それでは…… GO」

「せりゃああああ！」

いつの間にかカズマの背後に回っていたソウジが、ジェットスライガーの残骸で後頭部に一撃。

それを食らったブレイドKFは悶え、そのまま変身が解けた。

更に龍騎も変身時間の1分が来たため、照井がやっと止めに入った。正直、遅い。

「い、いだだだだ……」

「剣立並びに辰巳、変身時間終了だ」

「……レンさん……レンさん……レンさああああん！」

「……人の話を聞け！」

「……お前が言うなよ！」「……」

翔太郎・乾・ショウイチの三大ツッコミが、吼える。

とにかく、シンジとカズマによる破壊の1分間……終結。

「あ、終わったみたいだねー」

（あの荒れようについてツッコミを入れないほうがいいのでしょうか）

### 13話【意外な伏兵】（後書き）

不吉すぎる13話。

シンジはレンにしか止められませんよマジでww

ジェットスライガーは大破しました。

あれ、結局こんな星の下なんでしょうねえww

そして良太郎ww

カズマの欄が混沌としてきました。

リマジチームの状況はソウジ以外凄い事になっていますが（笑）  
オリジなら良太郎と剣崎の、顔面ヒットコンビが綺麗なままですが…

それでは。

## 14話【男のブルマは犯罪級】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司 × 変身不可（気絶中）

野上良太郎

紅渡 ×

門矢士 × 変身不可（気絶中）

<外野>

津上翔一 復帰

乾巧 復帰

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ 変身不可

剣立カズマ × ↓ 復帰 ↓ × ↓ 復帰 変身不可

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 変身不可

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判  
照井竜

## 14話【男のブルマは犯罪級】

あの悲劇の一分間が、終結した。

津上は呑気に被害状況を数えながら、乾と話している。

何処かの農夫みたいなのんびりとした空気。

コイツがライダーとは、恐らく、初見では誰も信じないだろう。

「うーん、たつくん。そろそろ危ないねえ」

「誰がたつくんだ！……まあいい、あの危険な狂戦士バーサーカー二人が勝手に変身してくれたことは喜ぼう」

オリジチームにとっては、それが唯一の救いというべきか。

…但し士と天道は、未だ意識が戻らない。

夏海はそんな二人を解放するべく、フィリップ協力の下……二人の顔に豆腐を押し付けた。

「光家秘伝・豆腐起こし！」

「ぐぼっ！？」

豆腐で叩き起こされる士と天道。

正直、タクミの起こし方より555倍も酷い。

豆腐がまだ顔に残っていた状態ではあったが、士は構わず話していた。

「……で、今どうなっている？」

「ええーっと、カズマさんが土君を当てて帰ってきました」

「畜生カズマめ。この仮は、いずれ返す……」

「返さなくていいです」

夏海に手痛く言われ、土はぶーたれていた。

オリジチームは、五代・津上・城戸・乾・剣崎・野上。

リマジチームは、芦河・辰巳・剣立・アスム・天堂・ワタル。

…これを見た天道は、この結末を悟っていた。

「……オリジナルチーム、負けたな」

「いやいや、あなたの仲間ですよね！？その言い分は酷くないですか……？」

「しかし事実だ」

「……まあ、確かにあの面子を相手に変身できない五代さんとかどう勝てと……」

天堂に文句を言うユウスケであったが、すぐに納得してしまう。

ボールはとりあえず、照井がオリジチームに回す。  
受け取った津上は、すぐに乾にパスを出していた。

「たつくんパス」

「だから“たつくん”じゃねえって！ああもういいや、とにかく……誰か狙うか……！」

「KA・ZU・MAを、ぶつとーばせ！」  
「Σチーズ酷ッ!？」

確かに士のテンションが、若干酷い。

とりあえず乾は、これ以上シンジを止めるための生贄を…墓地<sup>がいや</sup>に送  
つてはいけない。

そう悟ったか、非常な一撃を放っていた。

——対象は、ワタルだ。

「俺はもう、悪の道に染まる覚悟を決めたんだ。…元々そういう立  
ち位置だしなああああつ！」

「えっえええええー!？」

慌てふためくワタルに、ボールがヒット。

ボールは転がり、オリジ陣営に以降としたところを…すかさずアス  
ムがキャッチした。

やばい。

そう思う五代と剣崎であつたが、既にボールはアスムが取得…そし  
て子供とは思えないフルパワーで投げていた。

「…そりゃああああー!!」

「「ぎゃあー!!」」

「え、ちょ、……およおおおおー!!」

ヒットしたのは、良太郎。

哀れ…電王になる暇もないまま、しかし彼にしては結構持ちこたえ  
たと思えるぐらいの遅さで…『やっと』外野行きが決定。

照井はすかさず笛を鳴らし、アウト宣告。

「ワタル、並びに野上良太郎！外野に出ろ」

「はーい……」

「くそつ、カウンターを返されたか！」

「子供って強いよなあ……」

これで、内野はどちらも残り5人。

しかし“野上良太郎”という貴重な盾を失って……色々と悔やむ人間が表れていた。

特に、剣崎と城戸が。

「くっ……」

「マジかよ……」

「ウエエエエー！ウソダンドコードン……！」

「あああああーッッッ！そんな、剣崎と一緒に盾となってくれた

……あの良太郎がああああ……！」

「「いや、盾としてはお前が一番優秀だからな城戸？」」  
ガードベント

そんな非情な一言を言いながら、土と天道はツツコミを入れる。

まあ確かに、集中攻撃され、笑いのツボを受けても……あれだけの回避力を誇っている城戸は……間違いなくMVPだ。

だが、そんな時だった。

「——ふふふ…無様だな、ディケイド!」

「その声は…鳴滝!？」

鳴滝と言えば、あの桜井さんと同じ格好をしている眼鏡のおじさん。正直、映画ではゾル大佐になった理由すら分らない。

むしろその後のショウイチの制服+湯飲みコンボが壮絶すぎた。

次点でシンジと、スクリーンいっぱいに出たカズマのあの写真だ。

「うえ、あの、……俺関係なああい!」

「作者の笑いの論点は酷いからな」

「それはともかく。——鳴滝め、どこにいる!？」

「フッフッフ…貴様を倒すためにとやって来たが、無駄足だったよ  
うだな!だが、特別に姿を見せてやろう!」

そう叫びながら、鳴滝は現れる。

その背後に、ダークライダーを従えて……

ダークライダー達は、同じコスチュームに身を包んだ【Jリーグフォーム】…

そして自身は、【バッティングフォーム】となって、出陣してきた。  
…まあ簡単な話“エピソードイエロー”で出てきた映画ライダー8  
人+ネガ電王がサッカーユニフォームを、鳴滝が野球のユニフォー  
ムを着ての登場である。

「……って、…協調性なさすぎだろうがあああっ!？」

勿論、ツツコミ三大神の一人・乾がツツコミを入れないはずがない。しかし翔太郎は、サッカーユニフォームを着こなすスカルを見て…嘆いていた。

「お、おやつさん…そんな…おやつさんは野球派だと信じていたのにいいいいっ!」

「Σそこかよ!?つか、あんたもなんで来たんだ!？」

「簡単なこと!彼らは、私がデイケイドをドッジボールで倒すために結成した…夢のチーム!!彼らの力を以ってして、デイケイドを消させてもらおう!!」

自信満々に言い放つ鳴滝。

しかし、彼は忘れていた。

…こういうことでPTAよりも煩い、ワタルの存在に。

「…っていうか、土さんまずもう既にアウトですよ?勝手にしゃり出ないでくださいよ。それに『ドッジボール』と銘打っておきながら何故サッカーのユニフォーム?明らかにテレビの影響ですよね、それって。だったらあんたは時事に基き関取の格好でもしてきてくださいよ」

文句を呟きながら迫るワタルに、鳴滝は数歩退いていた。

この地点で、駄目な大人決定だ。

しかも目線を泳がせながら、言い訳する始末。

「…ゆ、ユニフォームが足りなかったんだ」

「体操服はどうしたんですか体操服にしてくださいよほら皆体操服でしょうがさっさと来てください納豆どんぶり」

「わ、分かりました…orz」

こういう時、王として苦勞して来た子供って…シンジ以上に怖い。

とりあえず、鳴滝達は皆一緒になって

——女子用体操服（しかもブルマ着用）になっていた。

「…タイムタイムタイム！やめて、目に毒だからあああ…！」  
「」

「常識的に男物使ってくださいよ！」

「うっ、煩い！在庫がなかったんだ…！とにかく、私が勝てば…デ  
イケイドは殺させてもらう…！」

何とか強引に済ませる鳴滝。

…しかしリュウガなんか、コートの隅っこで泣いている。

城戸はそれを慰めるために奔走し、天道はルールを聞いていた。

「そっちはそれでいいだろうが、…こっちは誰を出せばいいんだ」

「デイケイド、と言いたい所だが…奴は無様にも負けていたからな  
今残っている10人を相手にしよう」

（ソウジさんシヨウイチさんカズマシンジさんアスム君城戸さん…  
…ああ、これって死亡フラグ）

ユウスケは笑顔でそう思っていた。が、

…言ったら本当に鳴滝が惨めになるので、言わないでいてくれた。  
それがクウガとしての優しさ。

「……で、俺達への見返りは？」「……」↑映画で同時変身なかった4人

「あ、えつと、……その都度考えておきます。ハイ」

（…四人揃って【聖なる泉が枯れ果てたクウガ】なんだなあ、この人達……）

タクミはそんな事を思いながらも、口に出したら死亡が確定されるため…言わないでいた。

次回、ディケイドの運命を懸けた…最終決戦（？）！

## 14話【男のブルマは犯罪級】（後書き）

久々更新が、こんな眠気炸裂ネタでいいのか。

実はタイトル、【鳴滝襲撃】とかで迷ってました。

まあ、本当は鳴滝さんの乱入より…偶然やって来た……。のせいで×××がリタイア、なんて考えていました。

ソウジシヨウイチシンジカズマスム城戸は、揃ったら揃ったでもはや敵さんにとっての死亡フラグでしかないと思います。  
まあ、城戸とワタルを入れ替えても差し支えなし、むしろそっちのほうが最悪ですがww

ちなみに、自分は映画初見でシヨウイチさんの制服＋湯飲みコンボにお茶噴きそうになりました↑

変身権などは、1話のルールそのまんま＋引継ぎなので、変身可能なのは

オリジ↓剣崎、津上、乾

リマジ↓天堂、アスム

…でも外野によっては、…とことんカオスでしかないんでしょうね。

安全圏退避の為に、剣崎と乾が外野に逃げる事が予測されるww

それでは！

## 15話【コートの魔物】（前書き）

デスマッチ  
特別戦配置

オリマジチーム

<内野>

五代雄介

城戸真司

剣崎一真

芦河シヨウイチ

辰巳シンジ

剣立カズマ

アスム

ソウジ

<外野>

津上翔一

乾巧

鳴滝チーム

<内野>

G4

リュウガ

グレイブ

歌舞鬼

コーカサス

ネガ電王

アーク

鳴滝

< 外野 >

オーガ

スカル

司会

???

実況

左翔太郎

解説

フィリップ

ボールトス係

鳴海亜樹子

審判

照井竜

シンジのストッパー

剣立カズマ

フロッグポット（要：羽黒レンの声）

その他大勢の皆様

## 15話【コートの魔物】

急遽始まった、鳴滝チームVSオリマジ混合チームの戦い。  
各メンバー構成は、前書きを見ていただければお分かりだろう。

ちなみに、ルールは1話での取り決め通り&変身状態引継ぎと聞いたユウスケは、海東と話していた。

「…鳴滝さんずるいよな…だって、リュウガとかアークなんて元から変身状態じゃないか」  
「まあ、いいんじゃないかな。そのぐらいのハンデがあつて。どうせ負ける“しかない”んだから」

海東に言わせれば、『選択肢は【敗北】のみ』…  
まあ確かに、メンバーがメンバーなので普通にやったら、鳴滝が確実に終わる。

士も翔太郎も、そこを考慮してか鳴滝に提案を出していた。  
…若干、屈辱的な。

「おい鳴滝、——他はともかくお前が一番役立たずっぽいぞ？」  
「ああ。……ナスカメモリでも使うか？」  
「それか、響鬼の世界で音叉を使ったことから『こいつが響鬼！？』と余計な誤解を与えた…一発芸臭満々の鳴滝鬼なるたきとか」

「それでも駄目なら、そうだな…フィリップ。若菜姫からクレイドール借りて来い」

「おのれディケイド！ジョーカー！私に情けを掛けるつもりか！！」

鳴滝は馬鹿にされたと思ったか、拒否。

しかし、士はともかく翔太郎は善意で言っていた……

現にフィリップも、念のために若菜に連絡を入れたり…天道など、加賀美に電話したりしていた。

「…若菜さん、すみません。マスカレイド派遣してくれませんか？」

「加賀美か。至急、ゼクトルーパーを配備しろ。厳戒態勢を敷く」

（（もう、死人が出る前提で電話してるんだなあ…））

とにかく、そんなことがあっても…

ようやく試合が開始される。

そこには、暇を持て余したのか司会としてやってきた園崎若菜（表モード）と…同じように暇になったので翔太郎と一緒に実況・解説をすることにしたフィリップが、学校の体育館などに置いてある長机とパイプ椅子の簡易席で遊んでいた。

「はい、園崎若菜のヒーリングプリンス・特別編！今回はここ、世界の何処かにある何処かの河川敷の広場で行われている…ドッジボール大会の司会を担当しまーす！！」

「そして実況の左翔太郎と、」

「解説のフィリップだ。——さて、若菜さん…翔太郎。正直、どっちが勝つと思う？」

「……警察とかがいる方」

「迷う必要なんてねえ。…シンジを敵にした奴らの負けだ」

「——と、いうことで…予想通り鳴滝チームは圧倒的に不利。僕の見解でも、勝率は0・0001%とほぼ皆無に近い」

…本編じゃあ敵同士になったっていうのに、楽しそうだなオイ…  
乾はそんな事を思いながらも、またも一緒に外野に行くことになった津上と話していた。

「——もう、なんでもありだな」

「いや、まさか本物の若菜姫に会えるなんてねえ！真魚ちゃんのために、サインとか貰っておこうかな？」

「…聞いてねえし。……そういや、真里もファンだっけ…後で貰っておくか」

そして、ボールトスにやはり亜樹子がやってくる。

と言うか、そのただけに彼女は呼ばれてきたのだからしょうがない。

ジャンプボールはアーク、剣崎一真の一騎打ち

———というか、既にアークは剣崎一真の2倍近い大きさ。もはや、反則だ。

「「「反則過ぎるでかさだーッ!?」」」

「つか、よくあいつの分のブルマ用意できたな」

「特注品なんだろうね」

「とにかく、ジャンプボールスタートです！」

今更ツッコミを入れる実況と解説、<sup>しょうたつうかい</sup>楽しむ司会。<sup>わかな</sup>  
亜樹子も、力いっぱいボールを放り投げた。

「とおりやー！」

その結果、——アークは図体の大きさのせいで小回りが利かず、自分の手の位置よりも低い場所にボールを投げられ反応が送れる。そこを、すかさず剣崎が叩き…ボールはオリマジチームに回った。

「ウエーイ！」

「剣崎一真選手、ジャンプボール成功しました！」

「おおっと、ボールは芦河シヨウイチの手の中だ！」

「彼はそういえば、翔太郎がいなくなつた後攻撃に参加し始めた…まあ、シンジが『俺が取る』オーラを放出していた事、翔太郎がでしゃばりだつた事もあつたからだろうが」

「Σそこ、関係ないだろ！？」

楽しそうな司会さん達はさておき。

シヨウイチはとりあえず、一番狙いやすい相手を探す…  
…が、

機械構造のせいか動きの重いG4、  
ブルマのダメージが大きいリュウガ、

同じくブルマのダメージが大きいオーガ（外野）、

ブルマにかの“海東純一スマイル”をプリントしてある自己主張の  
激しいグレイブ、

ダブルでもないのに赤と緑のブルマを履きこなす歌舞鬼、

青い薔薇を手持っているコーカサス、

一人だけブルマがなくてカボチャパンツで代行されたネガ電王、  
無駄にでかいアーク、

、  
当たたら翔太郎が煩いし…何気に一人だけブリーフのスカル（外野）  
そして脚のすね毛が自重しない鳴滝…

—— ショウイチとしては、変人どもはシンジかソウジに任せてしまいたいと思っていた。

「…む、無理すぎる…しかし、デカブツ！貴様は沈める！！」

ボールは、アークの脚にヒットする。

それを見た照井はコールしたが、鳴滝がすぐに文句を言う。  
だが相手はあの照井、簡単に聞き入れられるはずがなかった。

「——アーク、出る」

「待て！アークはでかい、脚を狙うのは頭を狙うも同然だ！！」

「…何言ってるんだよあんた！？」

「俺に質問をするな！それに…左！！」

「ああ、——ルールを『1話のまま』で…アーク用に改定しておかなかったあんたも悪い！」

照井、そして翔太郎のお陰でアークは外野行き。

ボールはグレイブが持っていた。

「ふふふ…いい試合だな、感動的だな、だが無意味だ」

「…何処まで僕を馬鹿にしているんだああっ！」

「ああと、海東大樹が剣立カズマのセリフを流用した！」



フロッグポットの音声か、また聞こえる。

それを聞いたシンジは、ボールをポロッと落とし……そのままレンを探しに行く。

ボールは、てんつてんつ……と可愛らしい音ではねながら歌舞鬼の元に転がっていく。

「レンさーん！ れえーんさあーん、レーンーさ——ん！！」

「いつ、今のはフロッグポット！？」

「一体誰が……はっ！」

「——フッフ……一番恐ろしいほうの龍騎は封じさせてもらっ！」

フロッグポットを持って居たのは、鳴滝。

なんと、いつの間にかその辺を徘徊していたフロッグポットを捕獲していたのだ……

これには翔太郎も文句を言わざるをえない。

「人のガジェット勝手に使うなー！？」

「ふん、勝負は勝てばいい！ 歌舞鬼よ、ゆけい！！」

「力、ブーキー！」

ボールを持った歌舞鬼は、注意が反れているシンジを狙う。  
だが

シンジは後ろを向いている状態で、背後から迫っていたボールを取る。

後ろに目がついていない限り、取りにくい位置のボールだ……

そしてシンジはそのままの状態で、手首のスナップを生かし…… 17

0km/h超えの剛速球を投げていた。

大事な事なので二回言おう。

『後ろに手を回した状態で、ボールを掴み、手首のスナップだけで投げたのだ』

「邪魔すんな」

「カブキヤアアアアー!!」

「歌舞鬼ーッ!？」

「あの状態から、ボールを投げたッ!？」

「流石シンジ、もうあいつ妖怪だ!妖怪タツミシンジだ!!」

「興味深い。ゾクゾクするねえ!」

大絶叫する鳴滝・本当に楽しそうな若菜と翔太郎とフィリップ。

…本編と違って平和だなあ…

ユウスケはそんな事を思いながらも、オレンジジュースを飲んでいった。

——残る被害者・7人——

## 15話【コート of 魔物】（後書き）

若菜姫のキャラが分かってないのに出した自分無謀ww

たつのしそうなフィリップと若菜姫（+翔太郎）だなあ…

本編じゃ、そう言うのもう見れないもんな。

一応、ここでは『世界のどこか』なので敵味方関係なく楽しくしていればいいと思います。

だってライダー大戦の代わりにドッジボールしようとする世界なんだぜ。

DCDで個性のなかった男が君臨する世界なんだぜ↑

とりあえずこの世界において、羽黒レンは最後の砦。

それでは！

## 16話【ソウジご乱心・再】（前書き）

デスマッチ  
特別戦配置

オリマジチーム

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 変身不可

剣崎一真

芦河ショウイチ 変身不可

辰巳シンジ 変身不可

剣立カズマ 変身不可

アスム

ソウジ

<外野>

津上翔一

乾巧

鳴滝チーム

<内野>

G4

リュウガ

グレイブ 殉職

歌舞鬼 殉職

コーカサス

ネガ電王

アーケ  
×

鳴滝

< 外野 >

オーガ

スカル

司会

園咲若菜

実況

左翔太郎

解説

フィリップ

ボールトス係

鳴海亜樹子

審判

照井竜

シンジのストッパー

剣立カズマ

フロッグポット（要：羽黒レンの声）

その他大勢の皆様

## 16話【ソウジご乱心・再】

既に、アーク・グレイブ・歌舞鬼は……ダウト。

残る犠牲者は7人、もはや……どちらの勝ちになるのかは明白な試合展開だ。

但し、それでも若菜や翔太郎は楽しそうに自分の仕事をしていた。

「——さて、鳴滝チームは……いきなり窮地ですね！」

「ああ。正直、このまま全部供物になれ」

「弱いものは強いものに食われる、それが自然の摂理だ」

更にはフィリップまで凄いことを言う始末。

W組は、照井や亜樹子を足しても楽しそうであつた……

しかし見物している土達にとっては、この試合は【流れ弾注意】としか言いようがない。

「……まったく。鳴滝も、さつさと玉砕すればいいモノを」

「そう言うなって、士」

「まあ、どうせあと数話の命……気にする必要はないよ」

士・ユウスケ・海東の三人は、皆仲良くゼクトルーパーの後ろに隠れている。

よく見れば、天道や良太郎、鍛えている筈の響鬼ですらその後ろで

傍観中……

これは明らかに、シンジ辺りの流れ弾を警戒している。

——まあ、変身している城戸龍騎の仮面を凹ませたのだから……無理もない。

「おばあちゃんは言っていた。——使えるモノは、存分に利用しろ。だから加賀美……俺はお前を存分に利用する」

「天道……お前に似合いの言葉がある」  
「なんだ」

「——つの……【外道】！お前なんか、天道総司じゃなくて外道総司だぁッ……！」

加賀美、懇親のツツコミ。

しかし、それを聞いていた天道は……

「……らしいぞ、リイマジ」

「Σって、オリジナルのお前のこと言ってたんだよ……！」

……ソウジに責任転嫁。

しかし、そのソウジは……既に笑顔が怖い。

更にバキボキと指を鳴らし、加賀美を睨んでいた。

「加賀美新、別名カ・ガミン……後でおでん屋の裏に来い」

「——あんたの事じゃないってーッ!？」

「加賀美新に死亡フラグか、興味ないね」

「さあ、ボールは……鳴滝チームのネガ電王からです!」

この姉弟、<sup>きょうだい</sup>楽しそうである。

ネガ電王としては、シンジを狙えば即座に自分が消滅することは読めていた…

そこで、リュウガには悪いが…シンジはシンジでも、城戸真司を狙うことにしたのだ。

「クツククク…死ねえええっ！」

「俺ーッ!？」

「ああつと、城戸真司さん狙われました！避けられるでしょうか！？」

「……大丈夫だ、若菜姫…あいつの回避力は、俺が……俺達が保証する」

「そうだね」

叫ぶ若菜をよそに、結末が分かりきっている翔太郎とフィリップは真顔。

しかし、ネガ電王は既に城戸に照準を絞っている…

が。

「——ぎゃあああー！」

ネガ電王の攻撃！

城戸真司は脚のバネを巧みに使い、助走抜きの20mジャンプでかわした！▼

しかし、ボールは  
スカルに渡ってしまう!!▼

「はっ！」

「…のおおおーっ!？」

スカルの攻撃!

城戸真司は空中で体をよじり、余裕でかわした!▼

しかし、ボールは

ネガ電王に渡ってしまう!!▼

「な…く、食らえええっ！」

「あっひゃー!？」

ネガ電王の攻撃!

城戸真司は地面に手をつき、スナップを生かして10m飛び上がり  
回避した!▼

しかし、ボールは

そろそろ飽きてきたアスムがキャッチしてしまった!!▼

「——いい加減に沈め」

「どっぎゃー!？」

アスム、キャッチした状態で相手にボールを押し出すように投げる。  
つまりカメラハメ波のポーズを片手でしたような状態。

殆ど回転はしていないが、威力は超弩級……ネガ電王は顔面ヒット

で、撃沈してしまった。

それを見た照井は、すかさずアウトを取る。

「ネガ電王、出る」

「あ、あがががが…」

「……出ると言っているのが聞こえないのか？」

「照井さん！駄目だ、ネガ電王はもうHPが0…これ以上動いたら、消滅する！…」

五代が叫ぶ。

まあ確かに、あの威力のボール相手では…仮面ライダーであっても気絶は確実。

仕方なく、照井は陣野刑事と真倉刑事に命じてネガ電王を回収させた。

「仕方がない。運んでくれ」

「おう」

「…なんで警察がこんなことを…」

真倉は正論。

だが、仕方がない…これはドッジボールこそが正義の、世界だ。

四人当てられた鳴滝チームは、外野のスカルとオーガが復帰。ボールは、G4が持っていた。

G4は冷静に、どうすればいいか考える。

（——相手のボール取得率、89.6%…ヒット率100%。自

分は回避力がない、……普通に行けばカウンターで負ける)

外野も、ほぼ使えないもの揃い。

と言うか、大半がシンジ・1人だけアスムの被害に遭って動けないのだ。

アークは、あの大きさだと期待ができない。

…となると…

一回わざと取らせ(なるべく剣崎が城戸狙いで)、この中で戦力になりそうなオーガやスカル、コーカサスが取って投げる方がいいだろう。

特にコーカサスならば、ハイパークロックアップを生かしてシンジのボールも取れる。

そう思い、剣崎狙いでボールを投げた。

「……ふっ!」

「うわっ!?!」

「させるか!」

予想通り、ボールを取った人物がいた。  
だが

計算外だったのは

その人物が、唯一シンジにツッコミを入れた男・カズマだった。  
しかも、G4との距離は…ラインギリギリのため、かなり近い。

「——失せる怨念!!」

「k d i a ; w @ ; s q 9 1 @ o \* ツ ! ! ? 」

…バツカアアン!

意味不明な叫び声を上げながら、G4は倒れた。

しかも、その装甲は城戸龍騎の仮面の比ではなく……5cm陥没。

「G4出る。無理なら、加賀美が運べ」

「——できるかぁーッ!」

「おーっとお、G4も脱落!」

「さて、残るは5人…どうなることやら」

「楽しみですねっ」

照井の無茶振りに叫ぶ加賀美はともかく。

本当に楽しそうな、実況・解説・司会。

そんな彼らをよそに、ボールを手にとったのはコーカサス。

「——これ以上、調子には乗らせぬ」

『H y p e r C l o c k U p 』

ハイパーゼクターを使い、ハイパークロックアップをするコーカサス。

ハイクロといえば、時間をも巻き戻せるほどの高速移動…クロックアップなど目ではない。

それを間近に見た城戸は、自分の事を棚に上げて文句を言っていた。

「あっ!ず、ずるいぞそんなの!?!」

「『貴様が言うなあぁッ！』」

『では、見切ってみせよ…この音速の一撃を！』

コーカサスは、ハイパークロックアップ状態でボールを投げる。

音速の攻撃相手では、天道がハイパーフォームにならない限り不可能…

しかし。

「はっ」

コーカサスが投げたボールを、ソウジが難なく取った。  
誰もが見切れなかった、あの、音速のボールをだ。

「『えええー！？』」

「と、取りました！ソウジ選手、あの一撃を取りました！！」

「あの人も充分人間じゃねえッ！」

「それは元からだ、翔太郎」

もはや、リイマジネーション組が最凶になりつつある。

それはさておき、コーカサスはハイパークロックアップで逃げ続ける…

こうすれば、まず彼だけは暫くの間安全は保証されるだろう。普通なら。

『くっ…！？しかし、私を完全に捕捉して当てるなど不可の』

「——そいや」

ソウジは軽くボールを投げ、ライダーキックの要領でボールを蹴った。

ちなみに、覚えておこう。

ソウジは常人では存在すらできないクロックアップの世界に長い間存在していた、つまり感覚はかなり鋭いほう。

その上カブトとしてワームと戦い、孤独な戦いを続けてきた……戦闘経験もかなりあるだろう。

だからこそ手で投げるより、蹴ったほうが……かなり強いし速いのだ。

「オウノオオツ!!?」

『Hyper Clock Over』

「——ハイクロの世界から、コーカサスが出てきたーッ!」

「天堂ソウジ、強烈なシユートでコーカサスを葬ったー!これは、実に興味深いッ!」

なお、このシユートはコーカサスを倒しても勢いが留まらず……

見学していたワタルの所にまで、飛んできていた。

しかし、ワタルは近くに居たマスカレイドドーパントを一体、盾にして防御。

念のために言っておこう。

【ハイクロを打ち破ったボール】に反応し、マスカレイドを瞬時に

盾にしたのだ。

「マスカレイド・ガードツ!!」

「ぎゃああー!?!」

「「「ワタルすげえツ!!?!」」」

もはや、本気でリイマジが分からなくなってくる。

しかも映画に出た6人が特に。

そんな中で、ユウスケは「俺影薄いな」と今更思いながら、ポップコーンを食べていた…

——残る被害者・4人——

## 16話【ソウジご乱心・再】（後書き）

正直、今回は主題が

- ・金の薔薇が散る時
- ・今更なユウスケ
- ・リイマジ最凶伝説
- ・ハイクロを超える男
- ・外道総司
- ・超越のS / 真倉は正論
- ・蹴りはパンチの5倍の威力
- ・頼れる仲間みんな目が死んでる

……と、色々候補がありました。

でもいいや、結果的に今回一番ありえなかったのソウジさんだしww

シンジもありえないけど、他もありえないのがリマジ。

ユウスケはスペックの無駄遣い？

タクミは……怒ると最強だということが確定されました。

次回で鳴滝編を完結させたい……！  
それではっ

## 17話【男の急所】（前書き）

デスマッチ  
特別戦配置

オリマジチーム

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 変身不可

剣崎一真

芦河ショウイチ 変身不可

辰巳シンジ 変身不可

剣立カズマ 変身不可

アスム

ソウジ

<外野>

津上翔一

乾巧

鳴滝チーム

<内野>

G4 殉職

リュウガ

グレイブ 殉職

歌舞鬼 殉職

コーカサス 殉職

ネガ電王 殉職

アーケ ×

鳴滝

< 外野 >

オーガ

スカル

司会

園咲若菜

実況

左翔太郎

解説

フィリップ

ボールトス係

鳴海亜樹子

審判

照井竜

シンジのストッパー

剣立カズマ

フロッグポット（要：羽黒レンの声）

その他大勢の皆様

名前なき英雄

マスカレイド・ドールパントA

殉職

## 17話【男の急所】

マスカレイド一体が二階級特進したところで、鳴滝チームは残り4人。

オーガ・リュウガ・スカル・そして鳴滝だ。

翔太郎はドスの利いた声で、オリマジチームに言い放つ。

「おやっさん…もといスカルを殺したら全員処刑するからな」

「駄目だ翔太郎！辰巳シンジが、君程度の人間に殺されるはずがない」

「方法はある。若菜姫…………クレイドルのメモリをくれ。直刺しクレストリームで締め上げる」

「翔太郎！ツツツ！」

クレイドルエクストリームまで持ち出したら、すべてが終わるっつーの…

誰もがそんなことを思いつつ、試合の方に目を向けていた。

リュウガは、もう生きること自体を放棄している。

まるで浅倉威のように、その場で大の字になって寝転がり…やけくそな言葉を吐いていた。

「さあ、殺せよ…殺せつて……」

（（（うつわあ、一番可哀想だあの人…）））

「じゃあ」

「『じゃ』でボール構えるなよ！リュウガが可哀想だ！！…つか、俺が倒すからシンジお前動くな！！！」

城戸は叫ぶが、シンジはすでにボールを投げた後。しかし忘れてはいけない。

リュウガは、ミラーワールドの城戸真司…

こっちの城戸真司と似ている部分は、左右反転しているところ以外すべてだ。

つまり

——ここぞという時の回避力は、城戸並みだ。

「殺せ殺せよ俺を殺してくれよただし城戸真司お前以外に殺される気は毛頭ない！」

「『回避したーッ！？』」

そのまま寝転がって回避したリュウガ。

…本気で、城戸以外に殺される気はないらしい。

だがシンジのボールなど…例えば1バウンドしたとしても、相手も味方も取れるはずがなく……観客席に直行していた。だが。

「『ZECTガード！』」

…タクミとユウスケ、二人が協力して加賀美新と天道総司を盾にし

て防いでいた。

しかもその際、ボールは乾の所へ転がっていく。

「あーっと、観客席のZECTガードでオリマジチーム大チャンス！」

「あがが…」

「お、の、で、らああ…ッ」

「いやー、危なかったですね！ユウスケさん」

「ホントだよな！タクミ君！！」

盛り上がる若菜姫をよそに、清々しい顔をしている二人。

この後の、カブト&ガタツクのWライダーキックが予想できて怖い。

乾は、もうリュウガを狙うことは放棄した。

だが…

こんな茶番に付き合わされている木場<sup>オーガ</sup>勇治に同情し、当てる気でいた。

「つか、お前何やってんだよ」

「……なんか断れなくて」

「人がいいにもほどがあるっての…まあいい、当てるけどいいよな？答えは聞いてないが」

「あ、ちよつと待って。ある人に頼まれていたことがあるんだ」

オーガの言葉に、乾は手を止める。

そして…

オーガは【新仮面ライダー・オーズ】巨大な看板を持って、番宣をしていた。

「……平成12作品目！仮面ライダー<sup>オーズ</sup>000は9月上旬放送だよ！」

「お前がそいつの番宣をすんなーッッ！？」

「がふっ！」

乾のツッコミアタックが、オーガにヒット。

…これだけのために出てきたかと思うと、涙が出てくる。

しかもそれがスマブレ辺りの陰謀かと思うと、乾は溜息が出るばかりだ。

ボールは、剣崎がゲット。

リュウガは城戸にやられることを望んでいるため、除外。

となると…

ちやっかりスカルの後ろに隠れている、鳴滝しかない。

「うーん…スカルを狙ったら翔太郎が怖い、だったら…城戸！」

「うえ？」

「リュウガに当ててやってくれ。乾辺りが鳴滝さんを倒してくれる

！」

「……ああ！」

剣崎からボールを受け取り、城戸はリュウガを見据える。

リュウガも、もう避ける気はないようだ。

城戸に、言い放った。

「さあ、やれよ…」

「ああ。分かったよリュウガ…今、——お前をブルマの呪縛から解放してやるッ！」

城戸はリュウガ目掛けて、ボールを投げた。  
そのボールはリュウガの腹に当たり、そのまま外野まで転がる。  
リュウガは仮面の奥で笑みをもらしながら、立ち上がった。

「……………ありがとう城戸」

「ああ……」

「お前は、最後まで生き残れ。…こんな理不尽な戦いに打ち勝つんだ」

「——お前の思いは、無駄にしないからな！」

「あのー…青春するのは、いいんですけど……」

「とつととリュウガは外野に行ってくれないかな」

「おやっさん殺したらナス力直刺しで暴れるぞ」

若菜・フィリップ・翔太郎の三人が急かす。

というか、翔太郎だけは違う意味で怖かったが……

だが、残るはスカルと鳴滝。

鳴滝はスカルの後ろに来るよう移動を続けている、雑魚。  
しかしスカルは本気でいかなければ、やられる。

ボールを持っていたのは、乾からパスをもらった五代だ。

「くっ……隙がない」

「ボールを投げていいのは、当てる覚悟のある奴だけだ」

「そうか。じゃあ……」

——この中でっ、スカルを生かしたまま外野送りにできる人おー  
！！」

五代が、大声で叫ぶ。

どうやら彼は“できないことはないけど、スカルと本気で殺っている内にライジングの力が暴走しそうで危険”だから辞退したようだ。ただし、手を上げようとするシンジをショウイチとカズマが押さえ、アスムとソウジは“出来なくもないけど放置”していた。となると、期待できるのは…

「はい、剣崎」

「俺がアアツ！！？」

「剣崎なら大丈夫だって」

「無理！無理、無理ー！！」

この期に及んで大騒ぎする剣崎。  
だが、城戸は五代のボールを見て叫んでいた。

「あれっ！？ご、五代さん…それ夕張メロン！」

「え！？」

確かに五代の手には、夕張メロンが。

さっきまで、ボールだったのに…

そこで彼らは、かつての【城戸真司撃沈事件】を思い出し、フィードを見た。

すると…

「ふーふーのふー」

「？」

「「シンジイイツ!?」」

「……………死ね!」

恐ろしい笑い声をしながら、シンジがボールを全力投球。

しかも、向かった先は…

……………スカルの、股間だ。

「むぐつ!」

「「ぎゃあああああーっ!」」

「おやつさああああーん!」

「スカル、アウト。……………外野より先に病院に行け」

周囲が絶叫し、翔太郎が狂い、照井が冷淡に告げつつもスカルを氣遣う。

しかし、スカルは股間の痛みに耐えながら…

静かに外野に戻っていた。しかも翔太郎に忠告をする、余裕を見せながら。

「…いいか、翔太郎。いかなる時も感情的になるな、これが…ハイドボイルドの鉄則だ」

「お、おやつさん…!」

「いいボールだったぞ、……………鬼畜の方のシンジ」  
「ども」

【鬼畜の方の】には特にツツコミを入れていないシンジ。  
そのままスタスタと外野まで歩いて行った後、  
…スカルは、アークの巨大な足に隠れながら静かに悶えていた。  
唯一の救いは、それを翔太郎に見られていないことだろう。

「やっぱりおやっさんは深いぜ！」

「いい話だね、感動的だね、だけど無意味だ（鳴滝の意味で）」  
「さあ、鳴滝チームは…鳴滝さん一人だけです！」

そう。

今や鳴滝は、一人ぼっち…

しかもボールはショウイチが一生懸命雑巾で拭いたものを、ソウジが蹴る体制でいる。

つか、蹴るなら芦河氏の努力はほぼ無駄だろ。

「よし、蹴るか」

「やれやれもつとやれ」

「くっ…私の計画も破壊されてしまった！おのれディケイドおお  
！！」

「俺、関係ないだろ！？」

無実の罪を着せる鳴滝に、士はツツコミを入れた。  
そして…

ソウジ渾身のシュートが、鳴滝にヒットした。

「とっ」

「ぐばあっ!？」

そしてボールは跳ね返り、  
ショウイチがエクシードヒールクロウの体制で、連続攻撃を仕掛けていた。

しかも狙いは、股間。

「——一生失せとけ!」

「@l d a s p @ e o m w v 4 9 q 2 - 0 1 9 2 - v」m ^ ￥ - 0  
b i b ! ! ?」

「鳴滝選手、撃沈!…オリマジチームの完全勝利となりました!」  
「!」

「いやあ、結果は予想通りだったが…意外と面白かったよ」

「さて、救急車呼ぶか」

「つかシンジ、ショウイチ、…遠慮ないなお前ら」

「だって骸骨だし」

「鳴門海峡だしな」

## 17話【男の急所】（後書き）

リュウガⅡ城戸なら、回避力は高いよねって話。  
鳴滝チームやっと全滅です。

オーガとオーズって似てますよね？  
ロゴも、見ようによれば000…オーガになりますし。  
もう少しいい案はなかったのか。

個人的には、リンクスだめっちゃくちゃ困りましたがね。

次回は普通に試合です。  
それでは！

余談。

真理「あーあ、若菜姫に会いたかったなあ」

結花「仕方がないじゃないですか。真理さん、美容師のバイトでしたし」

真理「まあ、サインは巧に頼んだからいいんだけどね。……あれ？」

結花「？」

ピーポーピーポーピーポー…

真理「…なに、あの救急車の数」

結花「一台、二台……四台通りましたね」

真理「しかもあの方向……。……巧、まずいことしてないよね？」

結花「乾さんはそんなことする人じゃないですよ……」

真理「うん…そうなんだけど」

18話【放棄した翔太郎／照井の墓】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司 × 変身不可

野上良太郎 ×

紅渡 ×

門矢士 × 変身不可

<外野>

津上翔一 復帰

乾巧 復帰

DDDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河シヨウイチ 変身不可

辰巳シンジ 変身不可

剣立カズマ × ↓ 復帰 ↓ × ↓ 復帰 変身不可

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 変身不可

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判

照井竜

## 18話【放棄した翔太郎／照井の墓】

とりあえず、粗大ゴミとなった鳴滝軍団はオーガとリュウガが丁寧に持ち帰ってくれた。

そうして、試合がようやく再会  
…と思いきや。

翔太郎がだらーんと実況席に項垂れていた。  
若菜とフィリップが、焦った様子で彼に話しかけていた。

「え、ちょっと、大丈夫なの？」

「翔太郎、まさかオールドローパントの影響が？」

「違う…」

「じゃあ、来人と変身できなかった時の心の傷が今になって再燃？」

「鳴海壮吉を失った時の古傷が再生されたのかい？となると、リピ

ードローパント…」

「違う…」

心身疲れ果てたような声で、翔太郎は呟く。

それを見ていた城戸や五代、天道に良太郎は色々と話し合っていた…

「あ、もしかしてタイムベント！」

「サイクロンアクセルエクストリーム？」

「ハイパークロックアップか」

「もしかして時の運行の乱れが…？」

「違う…」

「じゃあ何なんだ」

士が、苛立ちながら声をかける。

すると…

翔太郎はいきなり立ち上がったかと思うと、はっきりと言い放った。

「——俺、もうドッジボールしたくねえ」

衝撃的な発言に、誰もが絶叫しない筈がなかった。

フィリップや若菜など、翔太郎の今の状況について面白がって検索をしだした…

とりあえず、乾巧の緊急カウンセリングが開始されることに。

「…………ええええええええー!?」「…………」

「興味深い！僕は精神学の本をとりあえず片っ端から…」

「じゃあ私は色恋についての本を！」

「……いきなりがあった？」

「いや、さ。…なんつつーか……普通のドッジボールなら、いいんだ。だけど、……今になって気付いたんだよ」

「は？」

「——やっている側だとすっげえ（Wシングジの意味で）疲れるのに、見ている分には飽きないって言うか。それに俺、もう外野だし…アクセルトリアル顔負けの高速ボールに脅かされる恐怖とか、城戸の回避力のせいで無駄に疲れることとか、したくねえ……」

…まあ、確かに。

そう呟いたのは、夏海だった。

翔太郎じゃなくても、あれは巻き込まれたくない類だ。むしろ、今までよく頑張っていたというべきか…

そして翔太郎は、輝かしい手で乾の肩を叩いた。

「そんなわけで、俺、フィリップや若菜姫とボケの立場に回るから。頑張ってツツコミしてくれ。」

「だーっ、そっちが本命か！？お前ツツコミに疲れただけだろ！こら、お前が抜けたら殆ど俺しかいなくなるだろ！！」

「シヨウイチはツツコミに入らないのか？」

「あの人もボケに回って、あんたソフジとコンビ組みでもしたら最悪なんだよ！ボケのアクセルクリームゾンスマツシュでしかねえ！！」

しかし、乾の説得ツツコミは空しく…

翔太郎が代わりに審判をするということで、照井とチェンジになった。

なお、状態は翔太郎の時の物をそのまま引き継ぐため、照井は変身不可能。

「…来るなら来い」

「おーっし、じゃあ試合再開！」

「あ、くそっ、翔太郎の奴元気になりやがった！」

「仕方ないよ…でも、……どーすんの？あれ」

吼える乾を、五代が宥める。

しかし…

五代の言う通り、照井も入った今のリマジチームは……正直、危険

な匂いがプンプンしている。  
もうシンジの地点で既にそんな匂いが漂っていたが、照井が入ると、  
一気にレベルが跳ね上がる。

ボールは、とりあえずジャンプボールで仕切り直しとなった。  
飛ぶ相手は、今度からはもう身長で揃えようということ…シヨウ  
イチと五代が飛んだ。

「くっそ、ソウジの奴逃げやがった」

「大変ですね…」

「それじゃ、スタート！とりゃー！…」

ジャンプボールは、五代が勝ってオリジチームに。

ボールを受け取った津上は、「それじゃあ」と狙いを定める。

「行きますよー」

「よし、取るぞ！」

「カモン」

「シンジはもう取るな！」

「カズマG」

「頑張りましょう…そして、師匠の敵を取る」

相変わらず楽しそうなりマジメンバー。

ただし、彼らは驚愕する。

何故なら

「えーい」

津上翔一の投げたボールは

—— スイカになって襲い掛かって来たからだ。

「……ええええええええー！？」「……」

「まあ！いいスイカ！！」

「あれは津上翔一が育てているもので……甘くておいしいと評判だ。そつだな、お金に換算すると……1玉1000円の価値がある」

「……うわつと！？」

上に放り投げられたスイカを、ショウイチが慌ててキャッチした。だが、次の瞬間……いつの間にかボールを持っていた乾がショウイチに思いつきり当てていた。

「とりあえず、—— 翔太郎への怒りの片鱗見せてやるぜええええ！」

「……ふうつ！？」

「芦河さんアウト！……ってか、おい、今のどついう原理だ！？」

「簡単だよ翔太郎。…… ボールは元々、乾巧が持っていた。だが、津上翔一はアギトの超能力でスイカをボールに見せかけて1玉10

00円のスイカを投げる…その際に、乾巧が投げるという作戦だったのさ」

「ずるっ!?!」

思わず、亜樹子が叫ぶ。

しかしこれは、超能力の使用禁止といった細かい設定がされていない。

勿論、辰巳シンジという存在も使用禁止されていない。

「ず、ずりい…超能力者ずりい!」

「こつちも超能力に近いことができる人はいないんですか」

「シンジ、…ギルスになれないか?」

「ソウジさんこそアナザーアギトでいいからなったら?」

カズマが叫び、アスムがソウジとシンジを見、その2人は自分を棚に上げまくっている。

ちなみに、今のシンジの言葉を聞いたユウスケが

「——年齢的にはシヨウイチさんのほうがアナザーアギト…」

と呟き、その芦河シヨウイチによって強烈な拳骨を食らったとか。そうでないとか。

仕方がないので、ボールはカズマが投げる事になった。

ボールは五代が取り、変則的なボールを投げてくる。

「よし、2002番目の技…【消える魔球】!」

「…なっ、なにに!?!」

五代の投げたボールが、見えなくなる。

… 一体どうなっている！？

… またアギトの超能力か！？

誰もが、口々に話していた。

しかし答えは、意外と速く片付いてしまう。

「——うわーっ、照井さん！照井さああん！！」

「誰か、人工呼吸！人工呼吸を！！」

良太郎と紅渡が、大騒ぎしている。

よく見てみれば、そこには、消えた魔球の顔面クリーンヒットを食らって気絶した照井の姿…

消える魔球自体は、本物だったようだ。

…… ノーコンである事を除けば。

「…… 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

「安らかに眠れ」

「土さん、天道さん、勝手に殺さないでください！」

「どどど… どうしよう……」

黙祷を捧げる土と天道、叫ぶ紅渡、うろたえる良太郎…

だが、そんな時彼の中にいるイマジンの一人… ウラタロスと、全てを悟ったソウジが衝撃的な一言を言い放った。

『良太郎、【触らぬ神に祟りなし】… 今の照井さんを起こしてみなよ、全てを振り切って暴走しちゃっよ』

「だが、万が一起きたら…鳴海所長とシンジ以外、手当たり次第に殺されるぞ」

「「「…」」」

とりあえず、彼らを選んだのは…

照井が二度と目を覚まさないよう、埋葬する事だけであった。

ちなみにこの際、亜樹子は気を利かせたシヨウイチが金を渡して「照井は何とかするから、皆に飲み物を買って来い」と言っ、遠ざけていた。

「…いいのか」

「これが最善の方法だろ」

「そ、そうだ…よ、な？」

「埋めた後のほうが怒られると思うのは、僕だけかな」

顔を顰めて訊ねるシヨウイチ、誤魔化す士、納得しようとする城戸、今後の不安を口にするタクミ…

とりあえず一つだけ言えることは、

…誰も止めなかった地点で、確実に亜樹子以外は後で全員照井に殺される（＋死体遺棄で逮捕される）ことだけだ。

## 18話【放棄した翔太郎／照井の墓】（後書き）

翔太郎が犯人フラグすぎるタイトルww

まあ、犯人は五代雄介ですが。

翔太郎は疲れてツツコミを放棄したようです。

まあ誰だって疲れます。

あんなにボール投げたのに全力で避けられまくっている地点で、既に諦めます。

とりあえず、

- ・翔太郎の元気のなさはオールドドーパントorCAXのせい？
- ・ボケのアクセルクリムゾンスマッシュ
- ・津上翔一の壮絶フェイント
- ・魔球
- ・埋葬
- ・シンジがオープンマイハート

今回やりたいネタは、一つを除いてできたのでよしとします。

最後のは、次回にでも…

話は変わりますが、キュアサンシャインの変身って可愛いだけじゃ

なくてカッコいいですよね。  
それでは！

## 19話【サンシャイン・辰巳】（前書き）

平成チーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

五代雄介 変身不可

城戸真司 × ↓ 復帰 変身不可

剣崎一真

ヒビキ ×

天道総司 × 変身不可

野上良太郎 ×

紅渡 ×

門矢士 × 変身不可

<外野>

津上翔一 復帰

乾巧 復帰

DCDチーム

・笑いのツボ使用不可

<内野>

小野寺ユウスケ ×

芦河ショウイチ × 変身不可

辰巳シンジ 変身不可

剣立カズマ × ↓ 復帰 ↓ × ↓ 復帰 変身不可

尾上タクミ × 変身不可

ソウジ

海東大樹 × 変身不可

左翔太郎 × 変身不可

<外野>

ワタル 復帰

アスム 復帰

その他

審判

フィリップ

ツッコミ

光夏海

ボールトス&緊急時ツッコミ

鳴海亜樹子

フィリップ試合放棄のための緊急審判  
照井竜（埋葬）

## 19話【サンシャイン・辰巳】

とりあえず、照井を埋めた後…

亜樹子に照井の所在を尋ねられつつも、全員

「大体分からん」

「ウェイ」

「おばあちゃんは言っていた、照井はトイレだとな」

……と、誤魔化していた。

とりあえずジュースを飲んで休憩した後、試合を再開する。

リマジチームはショウイチが抜け、残り5VS4という構図。

しかし、彼らにとつてさほどの問題というわけでもない。

むしろ…余裕に見える。

照井の代わりに（解説と兼用で）審判業に復帰したフィリップは、顔を顰めて見ている。

「…芦河ショウイチがやられた。それでも、彼らは余裕を崩さない……何かあるね」

「まあ、シンジは変身抜きでも……だしな」

「どう挽回するのが楽しみです！」

言葉を濁らせる翔太郎・楽しそうに司会を勤める若菜。

しかし、事件は…次の瞬間、起こった。

「——よっしゃあ！いくぞー！」

城戸が、ボールを投げる。

しかし…

なんと、そのボールにわざとアスムが当たりに来たのだ。

「おっと」

「えっ？」

「——これは、イージーミスか…？」

「…な、なんと！アスム選手、当たってしまいましたー！」

翔太郎と若菜が、驚く。

だが、天道は顔を顰めながらそれを見ていた。

「これではみすみす数を減らしたただけだ。……まさか、」

「「「え？」「」」」

「考えてもみる。そもそもアスムは、ワタルとセットで特別ルールがあつたはずだ…」

ボールは、カズマが受け取る。

そして…

なんと、一気にユウスケ・ワタル・アスムが動いた。

——そう、『変身』だ。

「「「変身ッ！」「」」」

「え！？」

「おいっ、嘘だろーッ！？」

「…ユウスケ、蹴れー！」

カズマが、ボールを投げる。

その瞬間に小野寺クウガは、カブトさながらの回し蹴りで城戸を狙う。

例によって城戸は綺麗な回避能力を見せたが…ボールは、アスム響鬼に渡る。

「どおりやああああ！」

「ひゃー！？」

「そおい！」

パンチでボールを返す、アスム響鬼。

今度は、ボールが津上を強襲…

しかし津上も、城戸さながらのブリッジで回避した。

「…お前もやるかあああ！？」「」

「うおっ、津上さんすげー！」

「いやー、どうも♪」

「——おいっ、まだ終わってないぞ！」

乾が叫んだ。

だが、もう時既に遅し…

ボールは、ダークネスムーンブレイクの体制に入っていたキバ（ワタル）の元まで来ていた。

「えっ!？」

『ウエイク、アープ!』

「…沈んでください!」

バック宙からのキックは、ブリッジのままでいる津上を襲った。

彼はあくまで、【城戸真司】ではない…

城戸のように、ブリッジの状態からジャンプするなどできるはずもなかった。

「うわーっ!？」

「…津上翔一、アウトだ!しかし…興味深いね」

「ああ…まさか…三体同時変身で尚且つトライアングル攻撃を決めてくるとは…」

子供2人の、『横投げOK』を上手く利用してきた戦法。

変身できるライダーの数は、これで天堂ソウジただ一人になってしまっが…

元々シンジもカズマもアスムもショウイチもワタルもライダーの力が必要ないほどの人材揃いのため、変身ルールなどあってもなくても良かったのだろう。

これでキバ（ワタル）も戻る事になり、フィールド内では更に熾烈な三体同時攻撃になる。

流石にこれはまずい、と思った乾は剣崎・良太郎に言い放つ。

「くそっ…おい!こっちも三人同時だ、良太郎はキンタロスを使え!」

「わ、分かった!」

「いくよ、キンタロス!」

『ようやくの出番…泣けるで!』

「『『変身！』』」

更に、乾ファイズ・剣崎ブレイド・電王AFも揃い踏み。  
ボールは津上がやられた際、五代が取っていた。  
五代は乾ファイズに渡し、彼はファイズショットを使いグランイン  
パクトを発動していた。

「——巧！」

「…もう一回沈め！」

「おっと！」

キバ（ワタル）が、回避する。

しかし外野では、電王AFが待ち構える…

電王AFは突っ張りの応用で、ボールを押し出す。

狙いがキバ（ワタル）一直線のため、彼狙いであることは明白だった。

「『うおりゃあー！』」

「僕狙いですか！」

「まあ、顔面当てればいいしなあ…」

狙われるキバ（ワタル）をよそに、立ち尽くした状態でソウジが見  
ていた。

確かに顔を当てればキバはすぐアウト判定となるが、…それ以前  
に…横投げルールも復活する事を分かっているのだろうか。  
しかし…

剣崎ブレイドがライトニングソニックで決めようとしたシュートを、

シンジが素手で止めた。

「Σヴェツ！？」

「…あーきーたー」

「しまった！五代、剣崎、逃げる！！城戸は…好きにしろ」

「それって酷くねーかーッ！？」

ライトニングソニックで威力が高められている筈なのに、何故、素手で取れるのだろうか。

——それは、シンジだからなのさ（by・門矢士）

とりあえず13話でのカズマへの雪辱払いも兼ねて、剣崎ブレイドに照準を定めていた。

「失せとけッ」

「ぎゃあああーっ！！？」

「誰か、フログポット！フログポットー！！」

「くそっ…駄目か！？」

「こ、こうなったら俺が…」

叫ぶ五代、諦める乾ファイズ、自分を犠牲にしようとする城戸。

そんな時だった。

「——おい、シンジ！何やってるんだ！？」

その声に真っ先に反応したのは、シンジ本人。  
剣崎ブレイドの窮地を救ったのは、……羽黒レン本人だった。  
レンの姿を見たシンジは、輝かしいばかりの笑顔で——しかも向日葵オーラを周囲に展開しながら、走っていった。

「……れえーんさあーん！」

「うおっ！？」

「——シンジがオープンマイハートオーツ！！？」

「引いてる！シンジさん、レンさん引いてるから！！！」

物凄い勢いでレンに向かっていくシンジに、レンは引き、カズマと小野寺クウガは叫んでいた。

ちなみにこの2人も、門矢士という男の飼い犬みたいなものである。  
レンはシンジの突進をヒラリと避けながら、士に詰め寄る。

「……おい。ドッジボールをやるのは勝手だが……うちのカメラマンを巻き込まないでくれ」

「いやいや、あいつも一応仮面ライダーだからな？」

「レンさーん！」

再度突進するシンジ。

しかし、またもレンはそれを回避……そのままシンジはカズマにぶつかっていった。

……コイツが龍騎きじのパロディでいいんじゃない？

士はそう思いつつも、レンと話している。

「とにかく、シンジを返してくれないか？これから、取材なんだ」

「悪いがシンジは……貸し出し断然OKだ。ああ、あの【常識の破壊者】を取材でも宇宙空間にでも持って行ってくれ」

「『コラアアアアーツ!?』」

「士！お前、シンジさん返してこっちの戦力減らす気満々だろ!? おいつその根源!」

リマジチームの都合を考えない士に、カズマ・キバ（ワタル）・アスム響鬼が叫ぶ。

更に小野寺クウガも、士にツツコミを入れる始末……

だがシンジは満面の笑みで城戸にボールを渡し、わざと背中を向けて体育ずわり。

——こいつ、抜ける気満々である。

「（ドキドキワクワク）」

「……シンジが……俺のパロディが背中で語っている。……これまでにない喜びのオーラと、『早く当てやがれ』という負のオーラが入り混じった背中で……」

「……当てる、城戸」

「ごめん巧……無理。負のほうが強すぎて当てられない……」

今のシンジを当てるには、——ドッジボールで死闘をしていたときより遥かに難しいだろう。

だが……

とこととカズマがやって来たかと思うと、城戸の背後に回り、ボールを持った腕を掴み……

「ヴェイ」

「だーっ!？」

180km/hを超える剛速球を、投げさせていた。

しかもそれは、シンジにクリーンヒット。  
当てられたシンジは、笑顔でレンの元に向かいつつ…副音声で物凄い殺害予告を出していた。

「——れええーんさああーん♪」

『副音声：カズマお前後で覚えとけ』

相変わらずシンジの体当たりはレンによって避けられたが、…これ  
での破壊者も離脱（＝取材行き）になってしまう。

この事態に、シヨウイチと操られた城戸は…カズマに意見していた。

「な、な、な、…なんでえええーっ!？」

「お前正気か!おいカズマ!？」

「……疲れた」

「「お前もかあああああッ!」」

コートには、二つの龍の絶叫が…無残に響いていた。

## 19話【サンシャイン・辰巳】（後書き）

シンジがオープンマイハート。  
本当は、

「あいつはてつきりダークの方かと…！」

「ムーンライト、いや、シャドームーンだと思っていたのに…！！」

とか言わせる予定でした。

こんな形で離脱した全ての破壊者（ディケイド公認）。

本当に何が起こるか分からない。

そして…

予告で大々的に言っていた【龍と蛇の名を冠する男】が止められちゃったよ。凄いね羽黒さん！

羽黒さんの回避率は、シンジ相手の場合のみ有効。

秋山のほうも、（城戸に対しての回避力が）多分同じぐらい。

これで真っ白な人間がソウジさんだけ…

っていうか、今回は10話でやったブツをする予定ですけどねww

今回は衝撃的な展開が待っています。

期待せずにお待ちくださいませ。

それでは！

## 20話【想定外の結末】（前書き）

——これまでの、仮面ライダーディケイド（+α）は——

タクミ「テメエら…覚悟しやがれええええっ!!」

城戸「皆、しっかりしてくれ…。……剣崎、目を覚ましてくれよ…」  
剣崎「…」

城戸「剣崎、ッ……………一真あああっ!!」

翔太郎「城戸。お前はもう終わりだ、そして、…ここから俺のターン!!」

フィリップ「天道総司。君はここで死ぬ」

カズマ「死んでもらうぜ…破壊者、——ディケイド!」

シンジ「そう。お前はここで終わる、そして」

士「まさか…」

カズマ「俺達が、」

シンジ「バトルファイトを復活させる」

鳴滝「デイケイド、やはり貴様は私が倒す。…ゆけ、我が同志達よ！」

ソウジ「…残念だが、俺は既に未来を掴んでいる…！」

コーカサス「ば、馬鹿な…！」

リュウガ「さあ、俺を倒せ…城戸真司。……お前に殺されるなら、本望だ」

城戸「…リュウガ…。でき、ないよ…だってお前は…俺なんだ…」  
リュウガ「やれええっ！」

城戸「リュウガ…リュ、ウ……うおおおおっ！」

シヨウイチ「進化した俺に、貴様が敵う筈もない」

鳴滝「ぐ、う…まさか、貴様…」

シヨウイチ「失せろ」

フィリップ「そんな、まさか…」

翔太郎「…照井iiiiiiiッ！」

シンジ「俺が死んだとしても、バトルファイトは終わらない」

シンジ「そう、——永遠にな！」

## 20話【想定外の結末】

「……って感じでしたよね！」

「そうです、そうです」

「——アスム君もワタルも違う、いや、……カズマ達辺りは合ってるのか!？」

勝手に纏めるアスムとワタルに、ユウスケがツツコミを入れた。

しかし、どうも間違っているようには思えず……突っ込みの不完全燃焼。

だが、その間に……タクミが気付いてしまった。

「あの、……照井さんは埋葬……いえ事情で離脱して、シンジさんはレンさんの所に行った……」

「それがどうしたんだよ？」

「……僕達、2人ほど……足りなくなってませんか？」

「……あ……」

そう。

シンジも照井も抜けた今、リイマジチームは現在2人少ないのだ。どっちも外野なので気にする必要はないのだが、そこに漬り込んで不戦敗にしてやろうと画策する破壊者が1名。

「……そうだな。人数が足りないなら、駄目だな！」

「……こらーッ!」「……」

「今更何を言っているんですか！」

「それに、心配しなくていい。…特別に呼んだ人物がいる」

士の発言に怒るリイマジ・オリジ。

夏海も【笑いのツボ】の体勢に入っていたが、そこへ、フィリップが指を鳴らす。

そうして現れたのは…

「…すいませーん、アイスくださーい」

「ほう、今日のスイーツはアイスにしようかな」

星を護る使命を持った、護星天使・アラタと…園咲琉兵衛ことテラ  
ィ。

いきなりのチョイス（特に前者）に、乾・翔太郎・ショウイチ・ワタルが一斉にフィリップに講義していた。

「……こらーっ！何を呼んでるんだお前は！？」

「いや、つか、親父さん巻き込むなよ！」

「30分前の世界の男をどうして呼んできた！」

「もう『仮面ライダー』関係ないですよね！？なんで戦隊！」

しかし、そんな彼らの講義も…

次の一言で全て怪人、いや灰燼となる。

「——だって、普通にやったらつまらないし」

「……」

「なあ、一言言っていないか相棒。…天堂芦河城戸剣崎が残ってるのにこれ以上面白くすんなーッ!!」

流石の翔太郎も、フィリップに踵落としツッコミ。

フィリップは頭を押さえつつも、二人にドッジボールへの参加を要請。

二人共、基本的に楽しいことが大好きなので快く応じてくれた。

ボールは、カズマの裏切りがあつたとはいえ城戸が投げて戻ってきたので…オリジチーム。

拾ったのは、五代だ。

「まあいいや。皆、攻めて行くぞ!」

「……おー」

剣崎・城戸・乾の反応は薄い。

それはそうだ。

テラーは変身抜きでも威圧感を放っているし、加えて一人だけ浮きまくりなアラタがいる（しかもちゃんと体操服に着替えている）。まずアラタは簡単だろうが、…残りがそういかなない相手ばかりというのも…大きい。

しかし、彼らは知らなかった。

フィリップのこの行動が、あんな惨劇を生むことになるのでは…

「——ちよつと…若菜やお父様がいて、……どうして私は呼ばなのかしら…来人……？」

ギリギリギリ、とタブーメモリを握り締めながらやって来た存在。

…園咲冴子…

彼女の米神には血管が浮き出ており、今にもメモリを直接ブレイクしそうな勢いだ。

とりあえず、服装が体操服+ブルマなのは…いつ呼ばれてもいいように、スタンバイしていた証というべきか。

「げっ、冴子姉さん」

「…その『げっ』の意味は何なのかしら？」

「おいおい…園咲一家が勢揃いしているな。シュラウドもどうせ、Wワタルのストーカー共のようにどこかから見ているだろうし…」

翔太郎が呆れてそう言っていると、

……次の瞬間、真っ白い体操服に緑のブルマを履いた草加雅人が仁王立ちしている姿を見て、昼に食べた白飯だったものを噴出していた。

「…これは俺も参加していいって解釈でいいのかなあ？」

「…「ぶっふー!?!」」

「っおい草加！お前は大人しく啓太郎と一緒に洗濯でもしとけ！？」

つか、ブルマの理由を教えろ！！」

「これも乾巧って奴のせいなんだ」

「俺は関係ないだろ!?!」

乱入してきた草加に、乾がツツコミを入れる。  
これまでにない大混戦。  
しかし…

『……貴様ら…覚悟はできているだろうな………』

地面の下から、声が聞こえたかと思うと…

突然亜樹子と夏海の足元にあった地面から、ズボツ！と手が生えてきた。

「きゃー！？」

「はっ、ま、まさか…」

『……そのまさかだッ！』

離れた場所からも手を出し、そのまま地の底より這い出てきたのは…  
埋葬した、照井竜だった。

それを見たユウスケとカズマが、一斉に騒ぐ。

「わーっ、わーっ！？」

「悪霊退散！たいさーん！！」

「誰が悪霊だ…！それにしても、……所長以外全員俺と同じ末路に  
遭わせてやる。地獄がお前達のゴールだッ！！」

「うわー！？」

どこからともなくエンジンブレードを取り出し、照井は真っ先に五代を狙った。

更に、意味不明な叫びを上げながら草加と冴子も変身する…

辺りはもはや、ライダー大戦さながらの光景と化していた。

「乾、お前死にたいんだってなああああつ！」

<Complete>

「来入…若菜、……覚悟しなさい」

<タブー！>

「お姉様。…今すぐ地面の味を知るがいいわ」

<クレイドール！>

「はっはっは」

<テラー！>

「えっ、ちょ、…親父さん！あんた理由不明すぎる変身すんなー！？」

叫ぶ翔太郎。

もはやドッジボールなど関係ない空気に、夏海は土に言い放った。

「土君！どうかしてください！！」

「…俺はただ、ドッジボールをしたかっただけなのに…。やはり、俺は破壊者だったようだ」

「え？」

「いいだろう。……全員破壊してやる！」

「何でそうなるんですかーッ！？」

そう叫ぶも、土は既にルール無視でディケイドに変身…しかも激情態。

夏海は思った。

これが夢なら、醒めて欲しいと…

そして……

くくく

「う、ううん」

夏海は、酷い頭痛を感じながらも起き上がる。  
そして今いる場所が、写真館の中だと知り…  
先程の光景は【夢】だったのだと。そう、思っていた。

「もしかして、夢…？ああ、良かった…」

安心する夏海。

しかし、その安心は…心配してきた祖父によって壊される。

「おや、夏海。行かなくていいのかい？」

「おじいちゃん。行くって、どこへですか？」

「忘れたのかい？あんなに楽しみにしていたじゃないか…」

今日のドッジボール大会」

その単語を聞いた瞬間、

…夏海は悲痛な叫び声を…上げていた。

「——ウソデイスドンドコドーンッッッ!?!」

## 20話【想定外の結末】（後書き）

まさかのループ。

まさかのタブー。

まさかのテラー。

まさかのカイザ。

まさかのアラタ。

まさかの照井竜。

↑

これまでのギャグを台無しにする気満々。

眠気テンションって酷い！↑

何気に今回の前書きシンジの『バトルファイトは永遠』がループという自体の複線？

俺、今ならあんなラストにせざるを得なかったディケイド製作陣に同情できる。

だって元々どつちのチームが勝つかなんて考えてませんでしたから↑  
オリジが負けるところを書くのもあれだし、かといってリイマジも負けさせたくないし…

おいコイツよくあの鬱+嘘予告リサイクル（分岐されし未来）書けたな。

まあどうせシンジは前回の地点で消す気満々（オイ）だったので後悔はないです。

ただ…辰巳がいなくなると途端にパワー減ったな、っていうのは……

反省点はどこかで生かします。

その時までにはシンジ以外でも笑い引っ張ってくれることを祈って  
ください↑

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7011k/>

---

平成VSDCDドッジボール大会！

2011年10月6日20時39分発行